

岐阜西本願寺三別院（岐阜別院・黒野別院・笠松別院）の一つ

# 正木坊から黒野別院へ

加藤貞泰・黒野に寺地誘致し後世賑わう



黒野城と加藤貞泰公研究会

岐阜西本願寺三別院（岐阜別院・黒野別院・笠松別院）の一つ

# 正木坊から黒野別院へ

加藤貞泰・黒野に寺地誘致し後世賑わう

写真 元黒野別院の山門扉（現在光順寺山門）

## 発刊に寄せて

刊行おめでとうございます。黒野別院の移り変わりがさまざまな文献に基づき活写されていて、興味深い内容でした。多数の史資料収集には相当な時間と労力が費やされたと拝察します。古文書、黒野村絵図など貴重な本物の数々に驚きつつも、楽しく読ませていただきました。「黒野別院は、黒野城跡に次いで貴重な文化遺産のひとつ」との結びの言葉が心に残ります。郷土遺産の調査・顕彰活動が今後ますます進展することを楽しみにしています。

令和元年(2019)10月吉日

岐阜市教育委員会 社会教育課  
課長 内堀 信雄

## まえがき

織豊時代の初め、織田信長が岐阜城から安土へ移った頃の天正年間に、美濃国方県郡正木村垣内に正木坊がありました。関ヶ原合戦後の慶長9年(1604)、京都本願寺が東西に分派し、正木坊の坊主衆や門徒衆は西本願寺派に属しました。加藤左衛門尉貞泰が黒野城主になって17年目の慶長15年(1610)、長良川の洪水による被害や黒野城下町の繁栄を目的に、正木坊を黒野へ移しましたが、当年に突然の転封で伯耆国(鳥取県)米子城へ国替えになってしまいました。その後、黒野坊、黒野御坊光順寺として続き、明治時代になると岐阜西本願寺三別院の一つ黒野別院へと変遷してきました。

黒野別院に関する資料は、多くの書籍や寺院などの発行資料に掲載されています。これらの資料を本紙に転載し、又、数年前から研究会の関谷太治さんらと共に調査し、新たに発見した関連資料などを紹介します。収載には県歴史資料保存協会の会長小川敏雄様、岐阜別院や河野六坊組合、本願寺派寺院ご住職様、大野家などのご協力に感謝を申し上げます。

令和元年(2019)10月吉日

黒野城と加藤貞泰公研究会  
会長 河口 耕三

## 目 次

|                  |   |
|------------------|---|
| 本願寺の歴代宗主         | 4 |
| 正木坊→黒野御坊→黒野別院の変遷 | 5 |
| 親鸞聖人に帰依する美濃の真宗教団 | 6 |
| 本願寺本山直轄御坊・別院     |   |
| 1. 本願寺岐阜別院       | 7 |
| 2. 本願寺黒野別院       | 8 |

## 文 献

|   |    |
|---|----|
| 1. 親鸞と蓮如 上『岐阜新聞』平成 19 年 濃飛歴史人物伝 37 小川敏雄 | 9  |
| 親鸞と蓮如 下『岐阜新聞』平成 20 年 濃飛歴史人物伝 38 小川敏雄    | 10 |
| 2. 本派黒野別院『岐阜市史通史編近世』                    | 11 |
| 3. 本願寺黒野別院『岐阜県の地名』                      | 12 |
| 4. 黒野別院沿革『稻中史談 9 集』梁瀬量覚記                | 12 |
| 5. 黒野町の分離独立・推移『黒野史誌』                    | 13 |
| 6. 寺院の建立 黒野別院『黒野』国島秀雄記                  | 14 |
| 7. 寺の引越し『黒野史誌』                          | 16 |
| 8. 黒野御坊の主な門徒『黒野史誌』                      | 17 |
| 9. 黒野別院『黒野史誌』                           | 17 |
| 10. 正木坊『鷲山史誌』                           | 18 |
| 11. 正木御坊(黒野別院)『鷲山史誌』                    | 19 |
| 12. 黒野別院沿革畧記『稻中史談 6 集』安藤節子記             | 19 |
| 13. お寺紹介 光順寺の由来について 黒野組広報誌『ストラ』1998 年号  | 20 |
| 14. 黒野別院だより 平成 4 年(1992)                | 21 |
| 15. ふるさと黒野 三ツ又『くろの白寿 第 27 号』国島五作記       | 21 |
| 16. 正木御坊のお話『ふれあい鷲山第 22 号』加納宏幸           | 21 |
| 17. 京都本願寺へ黒野御坊門徒ら対応『比類なき大変ニ相成候』小川敏雄著    | 23 |

## 関連資料など

|  |    |
|--|----|
| 資料 1 新本堂建立 奉加帳 總持山加藤光順寺                | 26 |
| 資料 2 「六字御名号由緒書」に記述の正木坊 )『大野家文書』        | 28 |
| 資料 3 六字名号調査                            | 31 |
| 資料 4 関ヶ原合戦前後に東西武将から出された禁制              | 34 |
| 資料 5 准如上人 正木坊の坊主衆・惣門徒衆宛書状『岐阜市史』・『岐阜県史』 | 36 |
| 資料 6 黒野村他 32 ヶ村 112 人連署書上『岐阜県史史料』      | 37 |

|       |                                   |    |
|-------|-----------------------------------|----|
| 資料 7  | 西郷の阿弥陀寺由来と黒野御坊『西郷の歴史』             | 40 |
| 資料 8  | 阿弥陀寺再興に黒野御坊の記述『大野市史 教願寺文書』        | 41 |
| 資料 9  | 方縣郡黒野村御坊光順寺御年貢地『玉木和廣氏蔵』           | 42 |
| 資料 10 | 黒野御坊・岐阜御坊入組につき願書『岐阜市史近世 2』 交人 郷文書 | 43 |
| 資料 11 | 光順寺と隣接の月照院 境界争いの記録『崇福寺史』          | 44 |
| 資料 12 | 古寺調 本願寺別院『多賀神社蔵』                  | 45 |
| 資料 13 | 明治6年の黒野村絵図『郷和彦氏蔵』                 | 46 |
| 資料 14 | 明治時代の黒野別院図『多賀神社蔵』                 | 47 |
| 資料 15 | 絵図に見られる掛所など『黒野城下町家中屋敷図 玉木和廣氏蔵』    | 48 |
| 資料 16 | 光順寺                               | 49 |
| 資料 17 | 専長寺                               | 51 |
| 資料 18 | 明善寺                               | 52 |
| 資料 19 | 安養寺 黒野別院の鐘楼 昭和6年に移設               | 53 |
| 資料 20 | 教徳寺 太鼓堂の長胴太鼓 黒野別院から移設             | 54 |
| 資料 21 | 石碑碑文 黒野別院の沿革                      | 55 |
| 資料 22 | 昭和・平成時代の黒野別院                      | 56 |
| 資料 23 | 正木村『岐阜県の地名』 平凡社                   | 59 |
| 資料 24 | 正木村差出明細帳『岐阜市史史料編近世 2』             | 60 |
| 資料 25 | 正木坊のルーツ 木田の福満院                    | 62 |
| 資料 26 | 木田の総仏堂と正木の総仏様＝黒野別院と縁＝             | 62 |
| 資料 27 | 江戸時代の河川『伊自良・鳥羽・板屋川通 堤御願墨図 国島家蔵』   | 63 |
| 資料 28 | 板屋川は三ツ又・正木垣内の南へ流れていた              | 64 |
| 資料 29 | 長良川の河川変遷                          | 65 |
| 資料 30 | 正木坊附近の河川考察                        | 66 |
| 資料 31 | 正木垣内の空中写真変遷                       | 67 |
| 資料 32 | 正木坊推定地と垣内永住民家・墓地                  | 68 |
| 資料 33 | おじいさんが子供のころの鷺山                    | 69 |
| 資料 34 | 領民を洪水から守る為に築いた「尉殿堤」               | 70 |
| 資料 35 | 黒野別院の本尊 阿弥陀如来像＝黒野あそか苑に安置＝         | 71 |
| 資料 36 | 正木ご坊と手洗い石『紙芝居 黒野のお殿さま』            | 72 |
| 資料 37 | 正木ご坊の大瓦                           | 72 |
| 資料 38 | 黒野城主加藤貞泰について                      | 73 |
|       | 編集を終えて 加藤貞泰の偉業と黒野御坊の影響            | 75 |
|       | 引用文献                              | 76 |

## 本願寺の歴代宗主

浄土真宗本願寺派 ホームページ[「本願寺グラフ」(本願寺出版社)より抜粋]

|        |                 |             |
|--------|-----------------|-------------|
| 開 山    | 親鸞聖人(しんらんしょうにん) | 【1173～1263】 |
| 第 2 代  | 如信宗主(にょしんしゅうしゆ) | 【1235～1300】 |
| 第 3 代  | 覚如(かくにょ) 宗主     | 【1270～1351】 |
| 第 4 代  | 善如(ぜんにょ) 宗主     | 【1333～1389】 |
| 第 5 代  | 綽如(しゃくにょ) 宗主    | 【1350～1393】 |
| 第 6 代  | 巧如(ぎょうにょ) 宗主    | 【1376～1440】 |
| 第 7 代  | 存如(ぞんにょ) 宗主     | 【1396～1457】 |
| 第 8 代  | 蓮如(れんにょ) 宗主     | 【1415～1499】 |
| 第 9 代  | 実如(じつにょ) 宗主     | 【1458～1525】 |
| 第 10 代 | 証如(しょうにょ) 宗主    | 【1516～1554】 |
| 第 11 代 | 顕如(けんにょ) 宗主     | 【1543～1592】 |
| 第 12 代 | 准如(じゆんにょ) 宗主    | 【1577～1630】 |
| 第 13 代 | 良如(りょうにょ) 宗主    | 【1612～1662】 |
| 第 14 代 | 寂如(じゃくにょ) 宗主    | 【1651～1725】 |
| 第 15 代 | 住如(じゅうにょ) 宗主    | 【1673～1739】 |
| 第 16 代 | 湛如(たんにょ) 宗主     | 【1716～1741】 |
| 第 17 代 | 法如(ほうにょ) 宗主     | 【1707～1789】 |
| 第 18 代 | 文如(もんにょ) 宗主     | 【1744～1799】 |
| 第 19 代 | 本如(ほんにょ) 宗主     | 【1778～1826】 |
| 第 20 代 | 広如(こうにょ) 宗主     | 【1798～1871】 |
| 第 21 代 | 明如(みょうにょ) 宗主    | 【1850～1903】 |
| 第 22 代 | 鏡如(きょうにょ) 宗主    | 【1876～1948】 |
| 第 23 代 | 勝如(しょうにょ) 宗主    | 【1911～2002】 |
| 第 24 代 | 即如(そくにょ) 宗主     | 【1945～ 】    |
| 第 25 代 | 専如(せんにょ) 宗主     | 【1977～ 】    |

## 正木坊→黒野御坊→黒野別院の変遷

|   |                           |
|---|---------------------------|
| <p>木田村地内に天台宗所属の<b>福満院</b>あり。度重なる水害の為、荒廃。</p>  | <p>本願寺宗主</p>              |
| <p>弘治元年(1555) 正木村庄屋で織田氏の家臣で正木村の梶田甚太郎、阿弥陀如来像を背負い、自身の屋敷に<b>草庵</b>建てる。</p>                               | <p>↑<br/>十一代<br/>顕如上人</p> |
| <p>永禄 10 年頃(1567) 松平下総守の家中、加藤太郎右衛門尉の末子加藤源之丞為長、岐阜落城となるや剃髪し仏門に帰依。</p>                                   |                           |
| <p>天正元年(1573) 梶田甚太郎の師弟山田孫助(六右衛門)、顕如上人に帰依、梶田家を相続し加藤為長を迎え阿弥陀如来像のお給仕役。天台宗から真宗本願寺に転派。(又は天正 10 年ともいう)。</p> |                           |
| <p>天正 5 年(1577) 山田孫助(六右衛門)正木村垣内に本堂、伽藍建立し<b>正木坊</b>と呼ぶ。</p>  | <p>↓<br/>十二代<br/>准如上人</p> |
| <p>慶長 5 年(1600) 関ヶ原合戦前の 8 月、正木垣内寺内に織田秀信の禁制(高札)立つ。</p>   |                           |
| <p>慶長 9 年(1604) 東西分派の際、准如上人から正木坊の坊主や門徒に協力を要請。</p>   | <p>↓<br/>十三代<br/>良如</p>   |
| <p>同年、准如上人へ 33 ヲ村の正木坊門徒らが尽力すると署名提出。</p>   |                           |
| <p>慶長 15 年(1610) <b>黒野城主加藤貞泰</b>、寺地寄進、<b>正木坊を黒野村に移転</b>。御坊所取持同行頭 12 名の頭百姓門徒らにより移された。</p>              | <p>略</p>                  |
| <p>7 月 15 日付、<b>加藤貞泰</b> 2 万石加増で伯耆国<b>米子</b>へ<b>転封</b>、10 月移動。</p>                                    |                           |
| <p>慶長 17 年(1612) 堂宇、伽藍落慶。以来、<b>黒野坊</b>又は<b>専教坊</b>とも呼ぶ。為長第一世の住職。専教坊と呼ぶ。</p>                           |                           |
| <p>寛永 7 年(1630) 第四世徳念住職(西改田村教徳寺住職次男)、堂宇、伽藍改築し中興。</p>  |                           |
| <p>寛永 8 年(1631) 本願寺御留守居職拜名。近隣 53 ヲ村の触頭、掛所を黒野坊に設置。</p>   |                           |
| <p>寛永 9 年(1632) 第十三代良如上人巡教、寺号を光順寺と賜れ、<b>黒野御坊光順寺</b>と改称。</p>   |                           |
| <p>正徳 4 年(1714) 再建がなり本山使僧光瀬寺が来て慶讃会開催。</p>   |                           |
| <p>宝暦 2 年(1752) 本山使僧が<b>黒野御坊</b>・岐阜御坊双方に廻在出来るよう願書。</p>  |                           |
| <p>寛政 9 年(1797) 西本願寺門跡立ち寄る。</p>   |                           |
| <p>文化 5 年(1808) 西本願寺門主立ち寄る。</p>   |                           |
| <p>文化 10 年(1813) 一時空坊となり教徳寺・仏心寺・専長寺の三カ寺が御坊の勤行を務める。</p>  |                           |
| <p>文政 5 年(1822) 黒野御坊本堂地上げ。翌年 4 月 8 日、完成入仏法要が営まれた。</p>   |                           |
| <p>文政 8 年(1825) 西本願寺門主黒野御坊に立ち寄り、村方より金百疋を寄進。</p>   |                           |
| <p>明治 9 年(1876) 宗規改正により本願寺<b>黒野別院</b>と改号。本願寺岐阜別院も改号。</p>  |                           |
| <p>明治 10 年(1877) 黒野別院設置に光順寺協力、7 堂宇伽藍を本願寺に寄附。</p>  |                           |
| <p>明治 13 年(1880) 光順寺、現在地に移転。</p>  |                           |
| <p>明治 24 年(1891) 濃尾震災で黒野別院の本堂・太鼓堂倒壊、光順寺全倒壊。</p>   |                           |
| <p>大正・昭和時代 黒野別院、門前町として賑わう。</p>  |                           |
| <p>昭和 34 年(1959) 伊勢湾台風で黒野別院の太鼓堂倒壊。</p>  |                           |
| <p>平成 8 年(1996) <b>黒野別院、岐阜別院と合併</b>。平成 9 年移築。当地は<b>あそか苑</b>になる。</p>                                   |                           |

## 親鸞聖人に帰依する美濃の真宗教団

親鸞聖人に帰依する真宗は本願寺8代蓮如上人の時代に盛んになる。蓮如は関東へ布教中、親鸞の旧跡である葉栗郡本庄郷木瀬(羽島郡岐南町三宅)に草庵を復活させ尾張河野門徒9ヵ寺を中心に発展した。文明2年(1470)、蓮如より宗祖親鸞の影像・絵伝4幅を渡され、木瀬道場に安置し輪番で管理した。天文5年(1536)頃、美濃河野門徒9ヵ寺(厚見郡内)が加わり18ヵ寺となる。美濃では蓮如の時代に天台宗からの改宗や建立で260寺以上という。

織田信長と本願寺11代顕如上人との間で行われた石山合戦や長島の一向一揆は、元亀元年(1570)から10余年に及んだ。この間、河野門徒を中心とする美濃門徒も、大坂石山に籠城する。天正8年(1580)和議が成立し、顕如は大坂を退去したが、教如は異議を唱えて籠城した。これが後に本願寺が東西に分派する原因となった。

本願寺教団の体制が整うにしたがい、地方教宣の中心として、各地に本山直轄の掛所・兼帯所が整備、新設された。それを御坊ともいわれ、後に別院とも称される。

現在、親鸞聖人の御影と絵伝などの宝物管理や法要は西6ヵ寺の河野六坊(岐阜市内の善超寺、浄性寺、慶善寺、西福寺、快樂寺、岐南町の専光寺)が毎年交代で行っている。



親鸞聖人御影(みえい)

河野六坊組合が管理  
岐阜市歴史博物館に寄託  
2012. 11. 28 筆者撮影

## 本願寺本山直轄御坊・別院

### 1. 本願寺岐阜別院

1570年～1590年頃、本願寺11代顕如上人が美濃国に巡教の折に、美濃国厚見郡今泉村西野(現岐阜市西野町)の土豪、一柳直高(子に直末と直盛)が信徒となって帰依する。一柳直高の没後、その墳墓のそばに一寺が建立されたことが始



本願寺岐阜別院 令和元年(2019)7月 筆者撮影



まりと伝えられている。慶長8年(1603)、本願寺12代准如上人が当地を巡教した際、一柳直盛が父直高の遺命により申し出、この寺を本願寺の坊舎別院として創立する。岐阜坊舎(西掛所)は、地名にちなんで西野御坊または西本坊・西御坊と称せられた。明治9年(1876)、本願寺岐阜別院と称した。当時は本派5大別院に数えられた。(以上、『岐阜市史通史編』・『ウィキペディア』より編集)



岐阜別院本門 説明板 岐阜市教育委員会

[参考 『一柳氏系図』：  
一柳直高の弟が一柳藤兵衛。  
藤兵衛の二女が加藤光泰の  
室(貞泰母)、藤兵衛の長男  
可遊の室に加藤光泰の姉が  
嫁ぐ。可遊の長男信濃光吉  
は光泰の長女と結婚し加藤  
家に養子で入る。黒野城下  
では家老。このように加藤家  
と一柳家は当時強い姻戚関  
係を結ぶ]

## 2. 本願寺黒野別院

天正5年(1577)、方県郡正木村に創建された正木坊は、慶長15年(1610)、加藤左衛門尉貞泰が黒野に寺地を寄進し誘致した。その理由は、正木坊が度重なる洪水による被害のため真宗門徒の要望、また黒野城下の発展を目的に移転したと伝えられている。

正木坊の移転後は黒野坊と呼んだ。その後、光順寺が留守居職を勤め黒野御坊光順寺と改称し、明治9年(1876)に黒野別院と改号。明治・大正・昭和時代の約100年間、「ご坊さま」と親しまれた黒野別院は平成8年(1996)に岐阜別院と合併となり、当地にあそか苑を設立した。



本願寺黒野別院 平成7年(1995) 関谷太治撮影

## 文 献



岐阜新聞 2008年(平成20年)1月9日水曜日  
濃飛歴史人物伝 38 濃飛の歴史を語る会・小川敏雄 記

# 濃飛歴史人物伝

38

## 美濃の真宗

美濃の真宗は河野九門徒を中心に展開してきたが、その勢いが本場に盛んになるのは親鸞(しんらん)より七代後の本願寺八世蓮如(れんにょ)の時代である。

蓮如は安永年間(一四四一―一四四八年)に關東へ布教に行く途中、親鸞の旧跡である木瀬(きせ)岐南町三宅を訪れ、尾張川(木曾川)の洪水によって流失していた草庵を復興させるよう九門徒に依頼した。そして、河野道場が復興された二四七〇(文明二年)十二月、親鸞聖人の御影(みえい)に「大谷本願寺親鸞聖人御影、釈蓮如判、文明二歲庚寅十二月十七日、尾張國葉郡本庄郷河野九門徒中安置物也」と書き添えて渡し、あわせて親鸞聖人の絵伝も渡し、輪番で守っていたように命じた。また、

## 親鸞と蓮如

下



七代後の本願寺八世蓮如(れんにょ)は、安永年間(一四四一―一四四八年)に關東へ布教に行く途中、親鸞の旧跡である木瀬(きせ)岐南町三宅を訪れ、尾張川(木曾川)の洪水によって流失していた草庵を復興させるよう九門徒に依頼した。そして、河野道場が復興された二四七〇(文明二年)十二月、親鸞聖人の御影(みえい)に「大谷本願寺親鸞聖人御影、釈蓮如判、文明二歲庚寅十二月十七日、尾張國葉郡本庄郷河野九門徒中安置物也」と書き添えて渡し、あ

なほ河野九門徒を中心に展開してきたが、その勢いが本場に盛んになるのは親鸞(しんらん)より七代後の本願寺八世蓮如(れんにょ)の時代である。

蓮如は安永年間(一四四一―一四四八年)に關東へ布教に行く途中、親鸞の旧跡である木瀬(きせ)岐南町三宅を訪れ、尾張川(木曾川)の洪水によって流失していた草庵を復興させるよう九門徒に依頼した。そして、河野道場が復興された二四七〇(文明二年)十二月、親鸞聖人の御影(みえい)に「大谷本願寺親鸞聖人御影、釈蓮如判、文明二歲庚寅十二月十七日、尾張國葉郡本庄郷河野九門徒中安置物也」と書き添えて渡し、あ



## 親鸞と蓮如

下

なほ、美濃の九門徒は、慶善寺・善超寺・徳寺・快楽寺・西福寺・西心寺・浄性寺・願成寺・真性寺で、いずれも見郡(岐阜市)にあった。蓮如の時代に創立された真宗寺は、二巨力寺を超えるように

一四八六(文明十八)九月には、河野道場を置き、美濃におき、真宗門徒は次第に増え、一五三六(天文六年)ころまでは、尾張河野九門徒に美濃の寺が加わって河野十門徒となった。この十門徒が輪番で親鸞の御影を絵伝を守ってきたが、河野道場が火災で焼失以降は、一年交替で守り回すようにした。

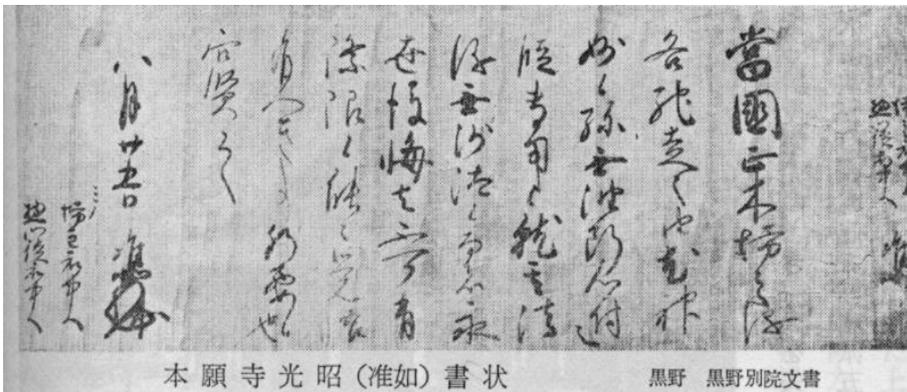
## 2. 本派黒野別院

『岐阜市史通史編近世』 昭和 56 年発行 680 頁

天正5年(1577)、方県郡正木村に創建され、正木御坊と称せられ、光順寺が代々留守居職を勤務した。

慶長9年(1604)、東西分派のさい、8月25日、門主准如は「ミノ坊主衆中、惣門徒衆中」にあてて、「当国正木坊の儀、各馳走の由尤も神妙に候、弥々油断なく心付の断、専用候」と申し渡した。[岐阜県史 古代・中世一 45 頁]

これに対し、9月23日、黒野・長良・中渡・早田島・下立・飼・古市場・今川・交人・石谷・下鶴飼・まはせ・ちつほ・西郷・中・改田・芝原・西改田・賀茂・尻毛・はね・小山・池上・萱場・飯島・則竹・柿ヶ瀬・かきうち・今光・鋳物師屋(いもじや)・真桑・彦坂・正木の33ヵ村。112人の農民門徒は、「正木村御寺内の儀、何様供この加判の者として御馳走申すべく候」と、連署誓書を提出した。[岐阜県史 古代・中世一 144 頁]



慶長15年(1610)、領主加藤貞泰が寺地を寄附したので、正木御坊は方県郡黒野村に移った。これが黒野別院である。

本願寺光昭(准如)書状

黒野 黒野別院文書

本願寺光昭(准如)書状

黒野 黒野別院文書

(書状解読文は本紙の資料5 36 頁参照)

正徳4年(1714)8月に再建が成り、本山使僧光瀬寺がきて慶讃会を修した「大谷本願寺通記」。ついで文政5年(1822)に本堂が再建され、翌6年4月、入仏法要が営まれた。[岐阜市史 近世二 602 頁]。

輪番は、岐阜西別院輪番が代々兼務した。「光順寺記」によれば、正木坊の開基は専教坊で、寛永9年(1632)12月に光順寺と改号し、正木坊と光順寺が雑居するような形となったが、明治10年(1877)より、諸事を区別して現在にいたっている。

宝暦2年(1752)、岐阜別院が、本山西別院へ、「本山使僧が黒野御坊の御焼香講に廻在する際に、岐阜触下へもみだりに入り込めば、岐阜十六日講の障りになるから、今後、両触下へ入りこまないようにしてほしい」と願ったところ、本山は、黒野光順寺と岐阜願正寺が協議して解決するよう、申し渡した。これに対し同年8月、黒野御坊肝煎同行三名は、従来通り使僧が双方へ廻在できるようにしてほしいと、出願した。[岐阜県史 近世二 491 頁〜]。

### 3. 本願寺黒野別院

『岐阜県の地名』 日本歴史地名大系 21 平凡社 523 頁

黒野城跡の西にあたり、旧城下町通りの南北の道に東面する。浄土真宗本願寺派。本尊阿弥陀如来。天正5年(1577)方県郡正木村に創建され正木御坊といわれていたが、慶長15年(1610)黒野村の現在地に移り、黒野御坊と称した。当地に移ったのは、領主加藤貞泰が黒野町繁栄のため寺地を寄附したことによる(同年2月日「加藤貞泰判物写」専長寺文書)。

岐阜別院、笠松別院(現羽島郡笠松町)と並び三別院の一つとして、京都西本願寺から輪番を岐阜別院に派遣、兼務させるなどの管理を行った。正徳4年(1714)に再建され、本山使僧光瀬寺が来て慶讃会を修した。(大谷本願寺通記)。文政5年(1822)には本堂が再建され、翌年入仏法要が営まれた。(「折立村庄屋一代明細記」佐藤文書)。宝暦2年(1752)肝煎同行の三名は、本山使僧が岐阜別院と当坊の双方に廻在できるよう願っている(「願書」郷文書)。西本願寺門跡は寛保4年(1744)・寛政9年(1797)・文化5年(1808)に立寄っている(「手日記」伊東文書)。当坊の管理は創建当初から光順寺が行い、ともに当地に移転した。光順寺を名乗ったのは寛永9年(1632)であるが、それ以後も当坊の留守居職を代々務め、当坊と光順寺は明治10年(1877)まで混在していた。

### 4. 黒野別院沿革

『稻中史談9集』 昭和 32 年(1957) 梁瀬量覚 記

往古、方県郡木田村字垣内に垣内御坊という天台宗の一寺院があった。弘治元年(1555)水害のために堂宇流出したので隣村正木村に山田六左衛門という奇特定の信者ありて自村に堂宇を建立し尊像を迎え正木御坊と呼んだ。時に慶長5年(1600)である之より先、天正元年(1573)、松平下総守家臣加藤太郎右衛門尉の末子、加藤源之丞為長剃髪し、仏法を語る山田六左衛門大いに帰依し正木坊舎建立と同時に迎えて住職たらしむ。たまたま京都西本願寺第十二代准如上人関東下向に際し正木坊舎に滞留教化説教されし時、山田六左衛門夫婦一家親族准如上人に帰依し、亦、住職為長も宗門発揚につき数々懇宅托を受くや大いに気合を一にし天正元年(1573)(又は十年ともいふ)に真宗本願寺に転派せり。ここに於いて領主加藤左衛門尉貞泰の特命により方県郡黒野村に移転し黒野坊舎と称するに至る。時は慶長14年(1609)なり。明治10年(1877)黒野坊舎を廃し黒野別院と改称す。以来盛衰ありといえ供、旧53ヶ村の敬門末により維持経営せられ、今日に至れり。

## 5. 黒野町の分離独立・推移

『黒野史誌』昭和62年 370～379頁

黒野町は慶長14年(1609)石見検地の折、町屋敷6町42畝22歩の広さで15の町名が付いていた。領主加藤貞泰が山陰の米子へ転封したため、武家の需要を失って町屋は痛手を受け、在町として生まれ変わるのを余儀なくされた。わずかに頼りになったのは黒野御坊が来て居り、その門前町となったことと、貞泰の時、町の地割りが決定して居り、町の敷地は奥行き17間に一定していたことである。

黒野町は貞泰の転封後33年、在町として独立した。独立といっても黒野村や下鶴飼村のワクはずされないので、内高として半独立し、在町としての一步を踏み出した。黒野町は寛文9年(1669)戸田丹波守の検地高で81石999を黒野村と下鶴飼村から分離独立させて成立した。面積は6町36畝27歩半。

享保14年(1729)は黒野町成立後60年経っているが、111軒・408人が住んで居り、高持百姓38軒、無百姓73軒。黒野町は東西4町・南北1町半の小域。町内には八代山薬師寺や天満宮があるが、専長寺・月照院・明善寺は黒野村に所属する。

正徳1年(1711)天神社・地藏堂・薬師寺の寺社があった。天神宮は始め田の中にあつたが、元禄6年(1693)薬師寺の隣へ敷地1畝4歩で移され、同寺が別当となった。天神宮の敷地の中にいつ創立されたか不明な市神小社がある。地藏堂は1間4面の堂で、堂主は居ない。正徳1年といえば領主である加納藩主が戸田氏から安藤氏に引き継がれた年で、新しく寺社改めをしている。天明8年(1788)東黒野町には古義真言宗八代山薬師寺(境内2畝4歩)があり、同寺境内に井筒地藏・稲荷大明神があった。天神宮の境内地は2畝14歩半、別に黒野村・町を総氏子とする諏訪大明神・多賀大明神・神明社が黒野村にあり、8月に祭礼をつとめていた。庚申供養塚は東黒野町には無かった。

文政5年(1822)黒野御坊は御堂の地上げをし、翌年4月建築を終わって8日入仏した。黒野御坊は元文1年(1736)には黒野御坊光順寺といていた。黒野御坊と光順寺は一つになっている。正木御坊が黒野御坊に移ったこと、黒野御坊が美濃国の惣門徒・惣坊主衆をみな支配してきたが、岐阜御縣所が建てられてから岐阜御坊・黒野御坊が並び立っていたこと、次いで平坦地・新規の岐阜御坊傘下の寺も多くなり、貧地の黒野御坊傘下の寺が少なくなったことなど宝暦2年(1752)黒野御坊の肝前正木村山田与三右衛門・黒野町安田善左衛門・西西郷村高橋用右衛門から京都本山へ報告している。

## 6. 寺院の建立 黒野別院

『黒野』 岐阜市立黒野小学校 PTA 28・29 頁  
昭和 49 年 (1974) 執筆者 国島秀雄記

江戸時代になると、黒野別院などの移転をはじめ、各氏の氏寺が創建されたが、これはとりも直さず近世になってからの人口の増加、集落の発展の結果とみられる。

黒野別院は天正5年(1577)織田氏の家臣で正木村の梶田甚太郎が死去し跡が絶えたので、その従弟山田孫助が頭如上人に帰依し、宅地を本願寺に納め、ここに坊舎を創建したもので、正木御坊といった。

これが前述のごとく、慶長15年(1610)加藤貞泰は城下の繁盛のため、正木より黒野に誘致した。すなわち、御坊所取持同行頭12人により移されたが、これらの人々は黒野・古市場などの頭百姓の門徒であった。この別院の移転は、慶長5年(1600)の大洪水により別院が水害をうけたので、これが原因の一つとも云われるが、寺地の状況からすればうなずけなくもない。そして移転後は、黒野坊舎・黒野御坊、略して御坊様と呼ばれた。佐藤家文書によれば、文政8年(1825)5月朔には「西本願寺御門主黒野御坊へ御立寄ニ付村方ヨリ金百匹疋寄進」とあり、門主が来ていることがわかる。

正木にあった当時、寛永9年(1632)から西改田村の教徳寺住職教覚の次男徳念が坊舎の留守居役を仰せ付けられ、光順寺という寺号をうけ、坊舎を管理した。

このように黒野御坊は光順寺が留守居を勤めたが、元来光順寺は呼び寺号ではなかったので、御坊との区別がつかないのでいざこざがあり、文化10年(1813)には一時空坊となり、教徳寺・仏心寺・専長寺の三カ寺が御坊の勤行(ごんきょう)などを務めたことがある。ついで教徳



寺など32ヶ寺は御坊を岐阜輪番書の兼帯にするよう本山に願い出ている。その後、明治5年(1872)の寺院明細帳に黒野御坊が脱落していることから問題がおこり、光順寺は手落ちにつき詫状を入れているが、同9年には留守居兼帯を免ぜられ、専長寺・専宗寺・正蓮寺・仏心寺の4カ寺に本山より坊舎の管理を命じている。結局御坊と光順寺の境内の区別がはっきりしないところに問題があるので、同10年その分離方を県に願い出ている。同年この「境内地所并建物分割願」が県令により聞き届けられ、総面積5反5畝7歩の内、御坊が3反7畝21歩を、光順寺が1反7畝16歩となり、熟談の上決定した。(図 11・仏心寺文書)

なお、黒野御坊は本願寺出張所とも云ったが、明治9年(1876)4月宗規改正により黒野別院と改号し、今日に至っている。



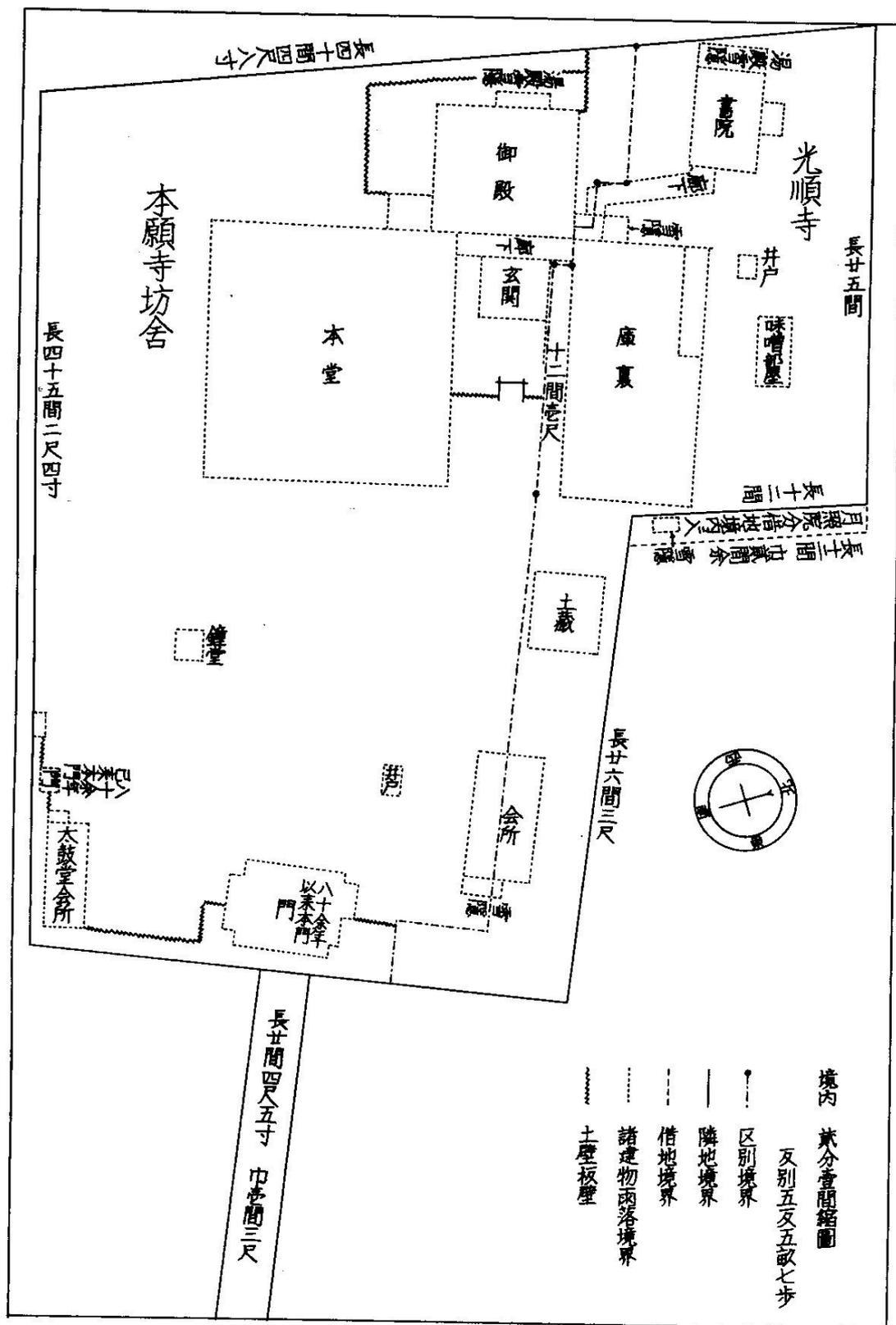


図11 明治10年ころの黒野別院（仏心寺所蔵）

## 7. 寺の引越し

『黒野史誌』昭和 62 年（1987） 151 頁

樂市を許可した翌二月、貞泰は専長寺の黒野城下町引越しを許可している。

『當町為繁昌、其寺引越之儀、令免許候、猶其寺地無其煩可申付者也、仍如件

慶長拾五年

二月日 左衛門尉 （花押）

専長寺 』

（専長寺文書・岐阜県史・史料編古代・中世1 88 頁）

この文書は県史には研究の余地ありとしたが、本文は「当町繁昌のため、その寺引越しの儀、免許せしめ候、猶その寺地これ無ければ申しつくべき者なり」と読み、浄土真宗専長寺の引越しを許可し、寺地も斡旋している。

また同年、黒野城下町へ掛所を正木から移してきた。前年（慶長14年）の「家中屋敷図」に家中屋敷の西、道の西側に掛所の位置が区切られ、その南に西光寺屋敷と記されている。西光寺は慶長検地帳に3畝17歩の敷地となっている。（玉木英治氏文書）

掛所は天正5年（1577）方県郡正木村に創設され正木坊と呼ばれ、美濃坊主衆が馳走してもり立てた。本願寺准如（光昭）が慶長8年（か）（1603）美濃の坊主・惣門徒に正木坊に尽力し法儀に努めよと論している。（県史 史料編 古代・中世1の 45 頁・黒野別院文書）。この正木御坊が黒野へ移ってきた。

林周教氏は始め専教坊が正木村に創設し、正木御坊と称したが、慶長15年（1610）鶺鴒黒野に移り、後、光順寺の寺号を許されたという（岐阜県真宗史 87 頁）。稲葉郡志は光順寺記によって、専教坊が自坊を正木村に創建し、正木御坊の始めから同御坊を管理し、御坊の留守居を勤めて居り、慶長15年正木御坊と一緒に黒野へ移ってきた。寛永9年（1632）12月自坊を光順寺と改めたが、歴代住職は御坊の留守居と触頭をつとめ、御坊と光順寺は混淆（こんこう）し、明治10年（1877）まで区別がはっきりしなかった。（稲葉郡志 162 頁）という。

- 追記：
- ・始めの**朱記 2 文字**は、『黒野史誌』の誤記訂正。
  - ・次の**朱記 2 文字**は、『岐阜県史史料編』と『黒野史誌』の不明文字（□□）の解説。  
（解説：「黒野」創立 100 周年記念誌 黒野小学校 PTA 21 頁 国島秀雄著より）
  - ・専長寺文書の原本写真は、本紙の資料 17 専長寺 51 頁に掲載）

## 8. 黒野御坊の主な門徒

『黒野史誌』昭和62年 152頁

本願寺は教如(光寿)・順如(光昭)の兄弟によって東西の両寺に分かれた。父顕如の死後、長子教如が後を嗣いだだが、一年で次子准如にゆずった。しかし教如は、隠居後、家康の助けにより慶長7年(1602)方4町の敷地を寄附され、ここに堂を建てて復職し、准如と並んだ。准如を西本願寺、教如を東本願寺といい、真宗は2派に分かれた。先述した准如の美濃国内の坊主・門徒にあてた示諭は2派に別れた折の文書である。この文書を受けた門徒は、慶長9年9月23日「正木村御坊寺内ノ儀」いかようとも馳走(尽力すること)すると、連署している。この連署は33カ村・112人にわたっているが、正木御坊支持の村と門徒が判明する。村は黒野・ながら(長良)・中渡り(長良川・中の渡り)で崇福寺辺の村・早田嶋(早田のこと)・下立(折立のこと)飼(洞の誤りか)・古市場・今川・ましと(交人のこと)・いしかい(石谷のこと)・下鶴飼・まはせ(近世初期蒔田山口井水の村々の中に「まばせ村」あり)(※貫町史史料編 251頁)・ちつほ[寛永14年(1637)「蒔田井組に知坪村があり、鋳物師屋村と同じく当寺加納藩領。(※貫町史史料編 255頁)・西郷・中・かいてん(東改田のこと)・しはわら(芝原のこと)・西かいてん(西改田のこと)・賀茂(加茂のこと)・尻毛・はね・小山・池上(池ノ上のこと)・かやは(萱場のこと)・飯島・則竹(則武のこと)・かきかせ(柿ヶ瀬のこと)・かきうち[慶長5年(1600)柿内正木郷と山田よしゑ氏文書にあり]、(岐阜県史史料編古代中世1の144頁所収)。また木田村柿内と伊藤郁次郎氏文書に記載。柿内は垣内のことか。]・こんかう寺(金光寺のこと。県史が金を今としているのは誤り、金剛寺村とも記す)いもし屋(寛永13年(1636)蒔田井組に鋳物師や村あり。(※貫町史史料編 253頁)・まくわ(真桑のこと)・ひこさか(彦坂のこと)・正木の33カ村である。正木御坊を中心とする方県郡の大半で、西派本巢郡の真桑村まで含んでいる。…………。

## 9. 黒野別院

『黒野史誌』昭和62年 1293頁

黒野別院は天正5年(1577)織田信長の家臣で正木村の梶田甚太郎が死去し途絶えたので、その師弟山田孫助が顕如光佐に帰依し、宅地を本願寺に寄進し、ここに坊舎を創建したもので、正木坊舎といった。これを慶長15年(1610)加藤貞泰は城下繁盛のため、正木より黒野に誘致した。すなわち御坊所取持同行頭12人により移されたが、これらの人々は黒野・古市場などの頭百姓の門徒であった。この別院の移転は、慶長5年(1600)の大洪水により正木別院が水害をうけたので、これが原因の一つとも云われ、又黒野城下の繁栄のためともいわれる。移転後は、黒野坊舎・黒野御坊、略して御坊さまと呼ばれた。

佐藤家文書によれば文政8年(1825)5月朔日(ついたちび)には西本願寺門主が黒野御坊へ立ち寄りに付き、村方より金百疋(ひき)を寄進している。

正木にあった当時、西改田村教徳寺住職教覚の次男徳念が坊の世話をしていたが、寛永9年(1632)坊舎の留守居役を仰せつけられ、その時、本願寺から光順寺という呼び寺号をうけ坊舎の管理をした。……黒野御坊は本願寺出張所ともいったが、明治9年(1876)4月定規改正により黒野別院と改号し今日に至っている。



## 10. 正木御坊

『鷺山史誌』1989年 33頁

慶長9年(1604)9月23日、黒野村外32ヵ村連署書上(かきあげ)は、「正木村御寺内ノ儀、何様供、此賀(加)判之者として御馳走申候」として32ヵ村の人名を並べている。その中に、

正木村 舟戸藤次郎・桑原源七郎・神山忠右衛門・佐藤四郎兵衛・佐藤三郎左衛門・  
神山藤四郎・山田孫助・山田久右衛門

柿内村 坂口甚左衛門・坂口勝五郎・山内弥五右衛門・山内助左衛門

の名が見られる。これらは村の地主層であろう。このうち山田孫助は慶長4年(1599)3月27日、正木村の田畑年貢につき木造兵庫助長広から代官所務を命じられている。(山田よしゑ氏文書) 正木村寺内とは同氏所蔵の天正10年(1582)12月 羽柴秀吉・丹羽長秀連署禁制に、「△△村寺内」とあるものと同じを指していると考えられる。正木村寺内はいつ設定されたか明らかでないが、慶長9年(1604)には黒野・長良・古市場・今川・交人・石谷村から西は賀茂・芝原・真桑村一帯に広く真宗教団をかためていた。

黒野城主加藤貞泰はこの寺内、即ち正木御坊を自身の城下に移し城下の繁栄をはかっている。これが黒野御坊の始まりである。

## 1 1. 正木御坊（黒野別院）

『鷺山史誌』1989年 119・120頁

中世の項で正木御坊の成立については述べたので、ここでは慶長15年(1610)藩主加藤貞泰が城下繁栄のため、当地域の正木(西正木垣内)より黒野へ移転させた以後を述べる。正木御坊の移転理由として、慶長15年(1610)の大洪水により御坊が水害をうけたので、安全地帯の黒野へ移されたともいわれている。

移転後は黒野御坊のことを略して当地では御坊さまと呼んだ。正木にあった当時、西改田村教徳寺住職教覚の次男徳念が御坊の世話をしていたが、寛永9年(1632)坊舎の留守店役を仰せつけられた時から、本願寺より「光順寺」という呼び寺号をうけて坊舎管理をした。



提供)

正木御坊の大石(平野豊氏

このように黒野坊舎は光順寺が留守居を勤めたが、元来光順寺は呼び寺号で寺がなかったため、御坊との区別がつかないため、いざこざがあり。

文化10年(1813)には一時空坊となり、教徳寺・仏心寺・専長寺の3カ寺が御坊の勤行を勤めたことがある。ついで教徳寺など32カ寺は御坊を岐阜輪番所の兼帯にするよう本山に願いでた。

結局御坊と光順寺の境内の区別がはっきりしないところに問題があり、明治10年(1877)その分離方を県に願い出て、これが県令に聞き届けられ、総面積5反5畝7歩のうち、御坊3反7畝21歩・光順寺反7畝6歩を、熟談の上決定した(仏心寺文書)。また、明治9年4月の宗規改正により「黒野別院」と改号し今日に至っている。(この項「黒野史誌」参考)

## 1 2. 黒野別院沿革畧記

『稲中史談6集』昭和30年(1955)9月 2年 安藤節子記

天正5年(1577)織田信長の臣梶原甚太郎の従弟山田孫助と言う者、本願寺十一代顕如上人に帰依し一字を建て正木坊と名を賜る。古川橋北方堤外に寺跡あり元柿内と言う地名。其の後顕如上人息男第十二代准如上人正木坊に留錫あり消息を下して専ら坊舎の繁栄を図る弥来、24年を経たる慶長5年大洪水ある為に低地となり、しば

しば水難を蒙るに至り、之より先文禄3年加藤左衛門尉貞泰、4萬石を領して黒野城を築く。在城17年、則ち慶長14、15年伯耆国米子に転封之に依り廢城となる（古町に城藪と言う堀をめぐる一画あり竹林をなす。在城年時短きにより完成を見ず）

一方正木坊水害に苦しみ居るに依って、城主黒野を去るに臨み転封され廢城となれば土地の衰微は必然領民を思うあまり、正木坊を黒野に移転。幾分にも衰微を防がんと誠意より有志と計り現在の地に移さる。此の年慶長17年なる故、城主の転封されてより三年目、黒野坊と称す。正木に在ること35年、創立以来350年黒野に移転して315年余なり（加藤香順氏より聞く）

### 13. お寺紹介 光順寺の由来について

くろのそ  
黒野組広報誌『ストロ』1998年号

往古、方県郡木田村に天台宗の福満院があつたが、度重なる水害のため、寺は荒廢していた。隣村正木村の庄屋、岐阜中納言の家中、梶田甚太郎が、阿弥陀如来像を背負い、自信の屋敷へ迎え、草庵を建てて朝夕のお給仕を尽くした。梶田甚太郎亡き後、山田孫助が梶田家を相続し庄屋となり、正木村垣内に仮堂を建てご本尊を奉安し正木坊と呼び、四圍の隣人の参拝する所となる。松平下総守の家中、加藤為長、岐阜城落城となるや、剃髪し仏門に帰依し、天正元年、庄屋山田孫助、加藤為長を迎え、本尊藏のお給仕をする。山田孫助一家をあげて垣内に本堂伽藍を建立し、正木坊と呼び、四隣の道俗、善男善女、参拝する。本願寺第十二世准如上人、関東下向に際し正木坊にお立ち寄りになり、加藤為長、上人に帰依して得度を給い、専教と法名を賜ると共に、天台宗から浄土真宗本願寺派に改宗転派する。

正木地内は、長良川、伊自良川の度々の氾濫、水害に悩まされ、慶長14年(1609)黒野城主加藤左衛門尉貞泰、特命し正木坊を黒野村に移転させ(現在の黒野別院の地)同17年、堂宇伽藍落慶する。以来黒野御坊又は住職の名を取り専教坊とも呼ぶ。寛永9年(1632)本願寺十三世良如上人の御巡教あり、寺号を光順寺と授賜され、本願寺御留守居職(出張所)を代々拝命し、明治10年(1877)、黒野別院設置に協力、堂宇伽藍を本願寺に寄附し現在の地に光順寺庫裏御堂を建立し今日に至る。(K)

## 14. 黒野別院だより

平成4年(1992)

天正元年(1573)正木村に建立、慶長15年(1610)黒野に移す。山田六左衛門正木坊を建立し、加藤為長を住職として迎え入れる。慶長10年(1605)准如上人の御化道により天台宗より浄土真宗に転派。慶長15年(1610)黒野城主加藤左衛門尉貞泰、正木より黒野に移転建立し、黒野坊舎と称す。為長第一世の住職となる。

## 15. ふるさと黒野 ミツ又

『くろの白寿第27号』平成9年(1994) 第六白寿会 国島五作記

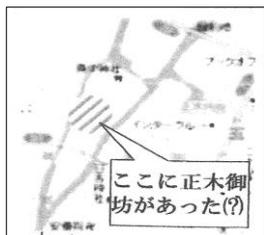
(抜粋) 城主加藤貞泰が慶長14年、黒野の発展を図るため正木御坊を移築した折、仮橋が壊れて巨大な庭石が川に落ちて、今も川に雑草も生えぬ場所が天王神社の北側にありと語り伝えられている。

## 16. 正木御坊のお話

『ふれあい鷺山 第22号』2009年11月 4頁 加納宏幸記

古記録(黒野別院文書)によれば、慶長11年(1604)8月25日付の本願寺法主准如上人の書状には、正木御坊に対して美濃の坊主衆・惣門徒衆が奔走したことを感謝する内容が記されています。

また、別の古記録(岐阜県史 古代中世一・山田文書)には、慶長9年(1604)9月9日、正木村の山田孫助ら33ヵ村、112人の門徒が「正木村御寺内」(正木御坊)について奔走を申し合わせています。33ヵ村とは、正木村の他、黒野・長良・中渡り・早田島・下立・飼・古市場・今川・ましと(交人)・いしかい(石谷)・下鶺飼・まはせ(馬伏)・ちつほ・西郷・中・かいてん(改田)・しばはら(芝原・北方町)・西かいてん(西改田)・賀茂(北方町)・尻毛・はね・小山・池上・かやは(萱場)・飯島・則竹・かきかせ(柿ヶ瀬)・かきうち(垣内)・こんかう寺(金光寺)・いもし屋(鋳物師屋)・まくわ(真桑・本巣市)・ひこさか(彦坂)の各村です。岐阜市北部・西部の村々や隣接する本巣市・北方町の村も含まれています。



山田文書に名を連ねる正木村の有力農民は、山田孫助のほか山田久右衛門・神山藤四郎・神山忠右衛門・佐藤四郎兵衛・佐藤三郎左衛門・桑山源七郎・船戸藤次郎ら7名で、33ヵ村中もっとも多い人数です。

正木御坊があった「正木郷」に、歴代の岐阜城主は手厚い保護を与えています。さきの山田文書によれば、天正11年(1583)池田元助は「濫防狼藉」(らんぼうろうぜき)などを禁止する禁制を出しています。

慶長5年(1600)、天下分け目の関ヶ原合戦が行われた時、西軍側の岐阜城主織田秀信は「柿内正木郷寺内」(正木御坊)に、同年8月、寺内には乱暴をしない、陣地を構えたり放火をしない、寺内の竹木を伐採しないための禁制を出して保護しています。

同じ様な内容の禁制を、東軍側の徳川家康も、同年8月に「城田寺村・正木村・鷺山村・則竹村」に出しています。人々の信仰が厚い正木御坊に対して、西軍・東軍の武将たちの配慮がうかがわれます。

慶長15年(1610)、黒野城主加藤貞泰(4万石)は、黒野城下町繁栄のために、正木御坊に寺地を寄進して黒野城下へ移転をはかります。正木御坊の地は、連年洪水に悩まされていました。それは正木村の南部を長良古々川、西部は旦川、北部は鳥羽川が流れ、長良川が出水すれば、激しく逆流して甚大な被害をもたらしました。

黒野城下町へ移転した正木御坊は、本願寺黒野別院(通称黒野御坊)といわれ、当地方では岐阜別院・笠松別院(羽島郡笠松町)と並び三別院の一(ひとつ)として、京都西本願寺から輪番が派遣され、勢威を振っていました。正徳4年(1714)に黒野御坊は大々的に再建され、本山使僧光瀬寺が来て慶讃会が開催されました。(大谷本願寺通紀)

いま、正木御坊があった南正木では、その遺徳を顕彰する行事が毎年行われています。

### 南正木では

黒野城主加藤貞泰と縁のある教徳寺と、西正木を訪ねてみました。本願寺年表には、「1603年美濃御坊を創す」とあります。昭和初期の河川改修以前は、西正木は南正木と続いていました。南正木に伝わる話によると、正木御坊は今の西正木にあたる所にあり、大水によって流されたご本尊の行き着いた所に黒野御坊が建立されたのだといいます。その証しとして、現在も毎年冬至に、「総仏様」という法要が、南正木公民館で取り持たれています。西正木の南北に走る1間道から途中西へ畦道のような4尺道がありますが、途切れていることから参道ではないかといわれます。

近くには元和2年(1616)と記された関ヶ原合戦に参戦した武士や信長公と刻まれたお墓が



あります。辺りの畑を深く掘ったら基礎らしき大石が出たといわれます。

正木御坊にあった手洗い鉢の石(八帖豊岩)を黒野御坊に運搬中、伊自良・鳥羽川に落とすと伝えられ、堀川改修時に探索しましたが残念ながらそれらしきものは見つからなかったそうです。

## 17. 京都本願寺へ黒野御坊門徒ら対応

＝小西郷村庄屋の小嶋当三郎が残した日記＝

小川敏雄著 文芸社『比類なき大変二相成候』

2018年12月15日発行より抜粋

慶応4年(1868)、幕府と倒幕派の衝突で鳥羽・伏見の戦いが勃発。その影響が各地に及び、美濃国もその影響下にさらされた。幕府領や大名や旗本の領主たちが右往左往するところとなったのである。

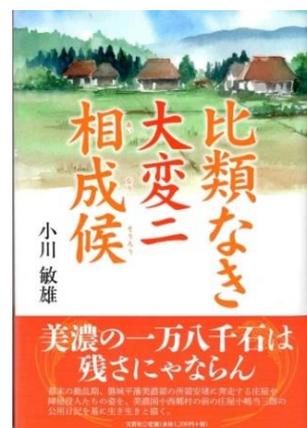
同年1月7日、小西郷村の庄屋小嶋当三郎のもとに京の様子の手紙が届いた。また京都の西本願寺からも急報がもたらされた。急遽派遣された使僧がやって来て、

「御門跡様(門主様)と新御門様(次期門主様)は御真影(親鸞聖人の像)を供奉されて山科へ退去されました。新御門跡様は御所の守衛を仰せ付かり詰め切りになっておられます。人数や糧米、御用途金(軍資金)が不足しておりますので、法中(僧の仲間)や門徒(信者)は申し合わせて駆けつけて欲しい、食料や御用途金の都合を付けて欲しい旨申されております。」

11日、当三郎は直ぐさま黒野御坊配下の者たちを集めて集会を開き、使僧からの伝達を伝えて協力を求めた。

「本願寺からの御頼みじゃ、是非とも御助けせにやならん。わしが思うに、みんなで米を出し合うて、御届けしたらどうかと思うんじゃが、どうじゃ。銭を出し合うて大津辺りで買うという手もある。……」当三郎の熱の籠もった呼びかけに否を唱える者はなく、米を出し合って届けることになった。白木綿を一尺ぐらいに切り、それに美濃黒野御坊配下何村と書いて届けることにした。当三郎は率先して米6俵を出した。また、一同の代表である勘定惣代となって自ら米を京都まで送り届けることにした。……村の領主磐城平藩の切通陣屋の役人から来陣を依頼する手紙が来て、京都行きは諦めて切通へ向かった……。

注記 : 崩し字で我流で書かれている日記の原文はこの通りの文面ではなく、会話のやりとりを脚色して分かり易く表現しております。(小川氏談)





## 関 連 資 料 な ど

**資料1** 新本堂建立 奉加帳 總持山加藤光順寺

昭和 63 年(1988) 光順寺住職 加藤 憲著

門徒各位

## 光順寺本堂建築趣意書

慈光のもと、当山門信徒の皆様には、益々ご清祥のことと、御慶び申し上げます。  
日頃、当寺護持発展の為、暖かいご理解とご協力をいただき、誠に有難く深く感謝申し上げます。

陳者、当寺奉安の御本尊像、阿弥陀如来は、(御丈 2 尺 2 寸 5 分)、正慶年間(1332 年)、仏師法印の作成、当寺、武家の奉安仏也、明治 8 年(1875)、常楽台鑑定す。

往古、美濃の国方県郡木田村地内に天台宗所属の福満院がありました。度重なる水害の為、寺は荒廃しておりました。弘治元年(1555)、未曾有の大水害により、流出の危機にあいました。

隣村、正木村の庄屋、岐阜中納言の家中、梶田甚太郎、阿弥陀如来御本尊像を背負い、我が屋敷へお迎えし、草庵を建て、朝夕の参詣お給仕怠らず。

梶田甚太郎亡き後、山田孫助、梶田家を相続し庄屋となって、正木村、垣内地内に仮堂を建て、阿弥陀如来を奉庵し、正木坊と呼び、四圍の隣人、参詣する。

正木村、鷲山城下に草案を結ぶ。松平下総守の家中、加藤源之じょう為長、岐阜落城となるや、剃髪し仏門に帰依し、天正元年(1573)、庄屋山田孫助、加藤為長を迎え尊像阿弥陀如来のお給仕役とする。山田孫助一家をあげて、垣内地内に本堂伽藍を建立し、正木坊と呼び、四隣の道俗、善男善女の参拝、群集する所となる。

本願寺第十二世准如上人、関東下向に際し、正木坊にお立寄りになり、上人の御教化に帰依して、加藤為長、得度を給い、専教と法名を賜る、と共に、天台宗を転派して、浄土真宗本願寺派に改宗する。

正木地内は、長良川、伊自良川の氾濫により、年々歳々水害に悩まされ災厄その極みに達する。慶長 14 年(1609)黒野城主、加藤左衛門尉貞泰、特命して、正木坊を黒野村に移転させ、(現在の黒野別院の地)同 17 年(1612)堂宇伽藍落慶する。以来、黒野坊、又は住職の名を取って、専教坊とも呼ぶ。

寛永 7 年(1630)、第四代徳念住職拜名するや、堂宇伽藍の、改築し寺院の対面を成就し中興する。

同 8 年(1631)、本願寺御留守居職を拜名、近隣 53 ヵ村の触頭となり掛所を黒野坊に設置する。同 9 年(1632)、本願寺第十三世、良如上人の御巡教あり、寺号を光順寺と授賜され、これより、黒野御坊光順寺と改称する。

爾来、第十七代周雄住職に至る間、御留守居職(本願寺出張所)を代々拜命し、黒野御坊

光順寺、繁盛する。

明治10年(1877)、黒野別院設置に協力、七堂宇伽藍を本願寺に寄附して、明治13年(1880)、現在の地に移転。

同24年(1891)10月、濃尾震災に倒壊し、その後庫裡御堂を建立、長年の風雨に耐えながら、門信徒の伝導教化への役割を果たしてきたが、老朽化し、耐えなくなった、昭和41年(1966)完成されたのが、現在の仮御堂であります。

昭和51年(1976)9月の集中豪雨には床下浸水し、それ以来、次第に老朽化が進み、いよいよ改築せざるを得なくなって参りまして、61年(1986)9月5日の総会で、改築の決定をしていただきました。

9月24日、再度門徒総代会を開催し、建築委員会が発足され、工事費は1億円を目標として、5カ年計画をたて、各村毎に建築資金の積立をお願いすることになりました。その後2年程経過し、着実に準備が進みつつあります。今後も、この度の企画に深いご理解とご協力を賜りますよう、切にお願い申し上げます。……………(以下省略)

### 光順寺由来

天正元年(1573)、松平下総守の家中、加藤源之じょう為長、岐阜落城となるや、剃髪して天台宗の仏門に帰依し、岐阜市正木垣内内に堂宇伽藍を建立し、正木坊と呼ぶ。

本願寺第十二世准如上人、関東御下向に際し、正木坊にお立寄りになり、加藤源之じょう為長、上人の御教化に帰依して、法名を専教と賜り天台宗を転派して、浄土真宗本願寺派正木御坊と改宗する。

慶長14年(1609)為長の甥、黒野城主、加藤左衛門尉貞泰、特命して、正木坊を黒野村に移転させ、(現在の黒野別院の地)堂宇伽藍を建立する。黒野坊又は住職の名を取って、専教坊と呼ぶ。

寛永7年(1630)、第四代徳念住職拝名するや、堂宇伽藍を改築し、寺院の対面を成就して、中興する。同8年(1631)、本願寺御留守居職を拝名して、近隣53ヵ村の触頭となり掛所(出張所)を黒野坊に設置する。

同9年(1632)、本願寺第十三世、良如上人の御巡教あり、寺号を光順寺と授賜され、これより黒野御坊光順寺と改称する。第十七代周雄住職に至る間、代々御留守居職を拝名。

明治13年(1880)、明如上人の御意志を尊重し、黒野別院設置に協力、堂宇伽藍を本願寺に寄附して、現在の地に移転した。

## 資料2 「六字之御名号由緒書」に記述の正木坊

大野孫市、顕如上人危惧に槍で馬上の野武士を討ち、御褒美に蓮如上人御染筆名号賜る

文政 11 年(1828)「六字之御名号由緒書」  
岐阜市下鶴飼 『大野家文書』より抜粋  
解説 2012 年 研究会員 國島京子

本願寺顕如上人、元龜天正年中の頃兵乱を御遁んと欲シ美濃國へ御流浪あらせられて山林或ハ藪中の庵室などに人しれず、御住居被為在方懸郡西改田村敬徳寺（後年敬の字教に改め教徳寺と号す）にも御入、又同郡正木村山田六右衛門といふ著き百姓の持庵に敬徳寺弟徳念と申僧住居為致有之候処。

上人此小庵へ御移被非徳念と御同居被非候。其事尾州清洲の城主織田信長の御聞に達し、奥平美作守被召出濃州の顕如上人流浪有之間。早速罷越討取来り可申（是ハ元御合戦有之候上人隣国へ忍ひ御入有之故信長 御疑心之思召故歟）台命なれば美作守家老加藤太郎左衛門へ請シ有之候處、太郎左衛門ハ心得ある武士ゆへ拙者清洲へ罷越一言申上可然可被非とて信長公へ罷出、此度本願寺顕如上人討取可申候主人美作守へ被仰付候ニ付愚考仕候處。

君ハ御名将の聞へ誰しらぬ者も無御座候へバ、終にハ天下御掌握被為在候事必定に奉存候、然るに仮令匹夫老人にても無罪を御付被非候へば、恥辱之至殊に上人ハ一宗の主長許君に奉敵対存念に候や篤と相乱聊にても曲心有之候ハバ、主人奥平ならずとも疲僧一人ばかりは某直に討取可奉差上候間、一応之糺御許容被下置候ハバ、難有仕合と委細に奉申上候處御名将に候へバ、被為聞取方候間。

太郎左衛門正木村へ来り、御目見へ仕委細奉承候處。信長公へ敵対之思召聊無御座。只高祖伝来之宗門相立候へ外に余念無御座候。御答ニ付其俣信長公へ奉申上猶又正木村に壺宇の房舎建立御願被申上候處。御許容被為在。正木村内字梯内御除地、正木坊と号し御禁札迄被下置候。

其後、秀吉公乍恐神君よりも右同所禁札被下置候三通共、今に山田六右衛門所持致居候處。尾州寺社御奉行より御改番も有之難有御事濃州の内、禁札有之寺社多く有之候へ共。

信長、秀吉の頃にて御当家のハ無之仍而寺社御奉行へ表立候儀ニ無之候得、如何仰候共拵へものにてても済可申、御当家のハ稀成事ニ候。

然るに山田六右衛門持の小庵を正木坊と取建候故、即徳念を住僧にいたし加藤太郎左衛門娘を妻にいたし候間、正木坊へ被下候、御書等も有之、其後慶長年中、方県郡鶴飼郷黒野村城主加藤左衛門尉貞泰、右坊黒野へ御引被成候二付、禁札、本紙山田六左衛門只今迄預り有之、当時黒野御坊ニ有之候禁札ハ其嚙ニ而候。

加藤左衛門尉貞泰、慶長五年九月関ヶ原合戦之後伯州米子へ移り今予州大洲二而五万石之御城主、但関ヶ原ニ御出陣也、加藤太郎左衛門ハ松平下総守様御家老今武州君之城ニ相動有之候。

本願寺へ格別之働き有之家也扱正木坊御建立有之、上人如可の思召ニや越前之国え御越し被非候ニ付、同行正木村山田六右衛門、方県郡下鶴飼村大野孫市、真桑村のもの其他式三人御共いたし候処、乱国事なれば越前において野武士集り上人へ狼藉いたし候ニ付大野孫市、槍を持って突拂追散し馬上の野武士壱人股より馬の鞍へ突通候ニ付、此槍股鞍と名付候。

上人危急之御難を救ひ候ゆへ為。御褒美蓮如上人御染筆之六字の名号御手づから頂戴、帰国いたし、慶長五年八月倅太兵衛下鶴飼に差置、加藤左衛門尉御供いたし尾州犬山へ出陣、同年九月関ヶ原にて討死いたし候。

依之同性之者、今以予州大洲に勤め致し候。法名光正院一円居士太兵衛ハ鶴飼村にて百姓に相成、西改田村教徳寺旦那にて明暦元未年(1655)七月十一日死去いたし則教徳寺過去帳始めに洞間居ニ有之候。……(以下省略)



南無阿弥陀仏（六字名号）  
由緒書と箱に蓮如上人御染筆  
由緒書記載の安禅寺（各務原市須衛）  
にて平成 24 年（2012）に発見

### 参考：「六字之御名号由緒書」に登場の人物など

- 蓮如上人 応永22年(1415)～明応8年(1499) 本願寺第八世。宗祖親鸞の浄土真宗中興の祖で親鸞の教えを書簡集「御文」や「南無阿弥陀仏」の六字名号で各地で教化活動を行う。
- 顕如上人 天文12年(1543)～文禄元年(1592) 本願寺第十一世。教団の最盛期を築く。門徒による一向一揆の掌握に努め石山本願寺を拠点に大名に匹敵する権力を持つ。信長と対立、元亀元年(1570)交戦状態に入り天正8年(1580)信長の和睦条件をのみ、石山本願寺を去る。
- 方県郡西改田村 教徳寺 浄土真宗本願寺派 2019年現在の住職 山田龍之助  
文治年間(1185～1190)芝原に建立の古寺。文安元年(1444)頃、本願寺蓮如上人に帰依し天台宗を改めて浄土真宗になった。  
加藤貞泰が黒野城築城中に仮住居、当時は山田之城、山田屋敷という館であった。当寺より西南方向の芝原に旧寺名敬徳寺があったが、黒野城が完成して貞泰が移った後、敬徳寺の寺基を現在地に移し教徳寺となった。  
正木に正木坊あった当時、西改田村教徳寺住職教覚の次男徳念が坊の世話をしていたが、寛永9年(1632)坊舎の留守居役を仰せつけられ、その

時、本願寺から光順寺という呼び寺号をうけ坊舎の管理をした。

- 徳念坊（教徳寺住職の弟）加藤太郎左衛門娘を妻にする。
- 方縣郡正木村 山田六右衛門 百姓・小庵
- 奥平美作守 織田信長家臣
- 美作守家老 加藤太郎左衛門
- 松平下総守
- 加藤太郎左衛門の娘 徳念坊の妻になる。
- 清洲城主 織田信長
- 六字名号 蓮如上人御染筆と記されているが年代は顕如上人の頃。
- 黒野城主加藤左衛門尉貞泰 慶長15年(1610)黒野城下へ正木坊を移転する。
- 大野家 下鶴飼大野家の由緒によれば、先祖は明応の頃(1490～1500)北条氏の家臣であったが、北条氏の姫君が土岐美濃守に嫁し着かれ、姫君にお付きして下鶴飼に参り、代々その家臣として使えて来たと言えられる。これまでの過去帳は無く、第一代を政長とし、第二代大野孫市。現在の大野家は二十代目になる。
- 大野孫市 蓮如上人が越前に行かれたとき、真桑の者と3人でお供。野武士が上人へ狼藉したとき孫市、槍で馬上の野武士を倒し上人を救い、褒美に上人御染筆の六字名号を頂く。帰国して慶長5年8月、加藤貞泰のお供し尾州犬山へ出陣、同年9月関ヶ原にて討死。
- 真桑の者
- 大野太兵衛 大野孫市の倅。
- 智勝院 莚田郡群加茂村桑山（現在本巢市郡府）曹洞宗の寺院で山号は大慈山。加納藩主戸田松平氏の菩提寺。
- 大野重六
- 切通村本郷 森七兵衛、次男政八。
- 森謙治 大野家の分家から切通村本郷の森七兵衛に養子で入る。相続が無く、本尊が無い安禅寺に六字名号を寄附する。
- 須衛村 各務原市須衛 深尾安兵衛門、深尾安五郎、他に同行総代1名。
- 安禅寺 各務原市須衛 道寿山安禅寺 妙心禅寺。2019年現在の住職 田中久勝 寛文年間(1661～1672)当村深尾八右エ門尉が安禅庵と称し建立。文政11年(1828)の当時は絶家状態であったので深尾姓の門徒が浄土真宗の六字名号を願望し、森謙治が寄贈した。

平成24年(2012)、由緒書に基づき研究会員(國島京子・郷和彦・郷孝夫・筆者)の調査で関市の安禅寺にて六字名号を発見し確認する。大野家から養子で入った森賢治が寄贈してから184年ぶりに日の目を見ることになった。



## 資料3

## 六字名号調査

大野家文書に記されている蓮如上人筆の六字名号を各務原市須衛安禅寺で発見しましたが、鑑定の糸口を探るために書籍や寺院などで蓮如上人と伝えるものなど調査したところ、各地に多数存在。本書に掲載許可を頂いた六字名号を紹介します。

## 名号

仏、菩薩の称号をさしている。「六字名号」・「九字名号」・「十字名号」などがある。

## 六字名号

南無阿弥陀仏（なむあみだぶつ、なもあみだぶつ）「南無」とは、帰依するを意味し「阿弥陀佛に帰依する」の意。

## 名号本尊と絵像・木像本尊

- ・名号本尊とは、浄土真宗の本尊の形態の1つ。「六字名号」・「九字名号」・「十字名号」を紙や絹などに書して表装したもの。
- ・親鸞の在世時、多くの仏教諸宗は、木像や絵像の仏像を本尊としていた。その情勢にあって、親鸞が名号を本尊として用いた理由については、親鸞は教化のため移住を繰り返す、寺を持たずに常に小さい草庵に住んでいたため、木像を持つことが不可能だったという考えがある。また蓮如は、本尊とするよう「六字名号」などを紙または絹に書し、庶民に与えた。このことにより、各家庭に本尊を安置することが可能になり、

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

蓮如は門徒のために六字名号をたくさん書き与えた。大坂の坊舎（後の石山本願寺）は六字名号の礼金で建立されたといわれている。 書籍『わかりやすい岐阜県史』

## ◇ 蓮如上人の筆と伝える岐阜近郊の六字名号

- ・表装の大きさは大小さまざまであるが、文字の大きさに合わせて表示。
- ・草書体と楷書体があるが、ここでは草書体を引用。



『本願寺派岐阜別院蔵』

書籍『蓮如上人五百回忌記念 蓮如上人展』1997 本願寺史料研究所

154 | 草書六字名号 蓮如上人筆 一幅

紙本墨書  
縦八五九 横三三・八  
岐阜市 本願寺派岐阜別院蔵

慶長五（一六〇〇）年、浄土真宗本願寺派第十二代准如（一五七七〜一六三〇）が岐阜を訪れた。それを機に同八年、地元岐阜の小野木三郎左衛門道栄・井上善兵衛常春・土川甚内休意らの力によって、東西四丁・南北四丁の敷地に、九間四面の堂宇が創建された。これが岐阜別院の始まりである。大谷派岐阜別院が旗本による創建であるのに対し、地元有力者によって創建された。

このような成立時期にある別院が蓮如の名号を所蔵していることは、近世期に流入されたものであり、岐阜における別院の重要性を考える必要がある。

（黒田）



各務原市須衛  
『安禅寺蔵』  
大野家六字名号由緒書に  
蓮如上人御染筆  
(縦44.3 横19.5)  
2012年6月筆者撮影



岐阜市西改田  
『教徳寺蔵』  
蓮如上人御染筆と  
伝える  
2012年5月筆者撮影



岐南町八剣  
『専光寺蔵』  
蓮如上人筆と伝える  
関市明淳寺蔵の写し  
蓮(むしろ)の上で書いたので  
寅斑(とらふ)の名号という  
2012年9月筆者撮影



本巣市曾井中島  
『正尊寺蔵』  
蓮如上人真筆  
「法園山正尊寺史」より



岐阜市黒野  
『専長寺蔵』  
寛永18年(1641)の火災で  
「焼け残りの名号」という  
(6字目が焼ける)  
2019年5月 関谷太治撮影



岐阜市上西郷  
『春日井家蔵』  
(蓮如上人伝承不明)  
(縦42 横13.5)  
2012年筆者撮影

『西郷の歴史』 昭和57年(1982)発行 878頁  
(写真はカラーに替える)



岐阜市中西郷  
『専宗寺蔵』  
2019年8月筆者撮影

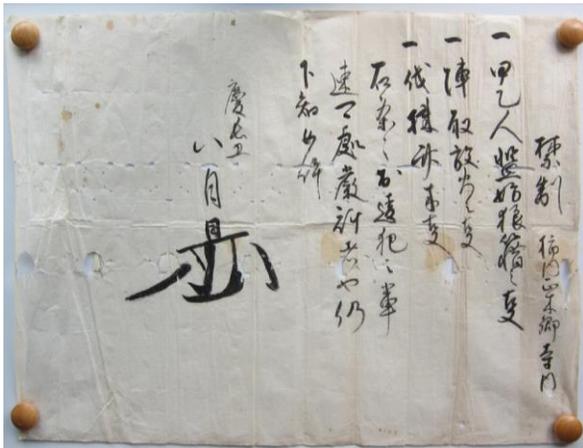


岐阜市上西郷広街道  
『遠山家蔵』  
(縦36 横14)  
2019年8月筆者撮影

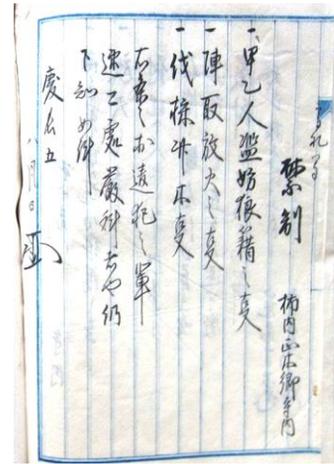
資料4

関ヶ原合戦前後に東西武将から出された禁制

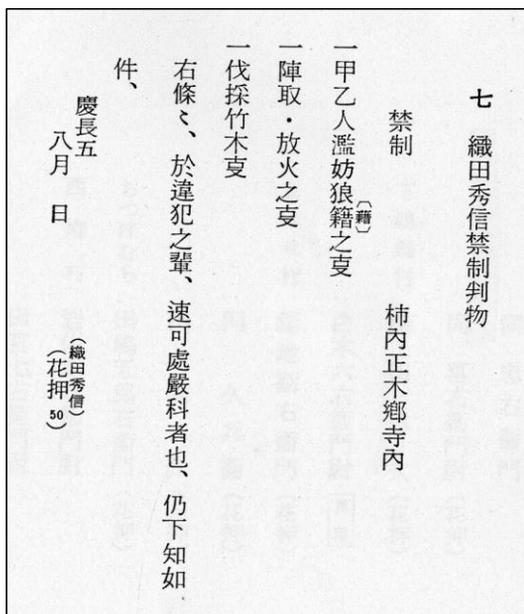
◇ 正木郷寺内(正木坊)宛て織田秀信禁制



織田秀信 禁制 高札写し(江戸時代に写し)  
『安田家蔵』2014.07.05筆者撮影



織田秀信 禁制 高札写し  
(明治28年5月寺院調 本派本願寺別院)  
『多賀神社蔵』2011.11筆者撮影

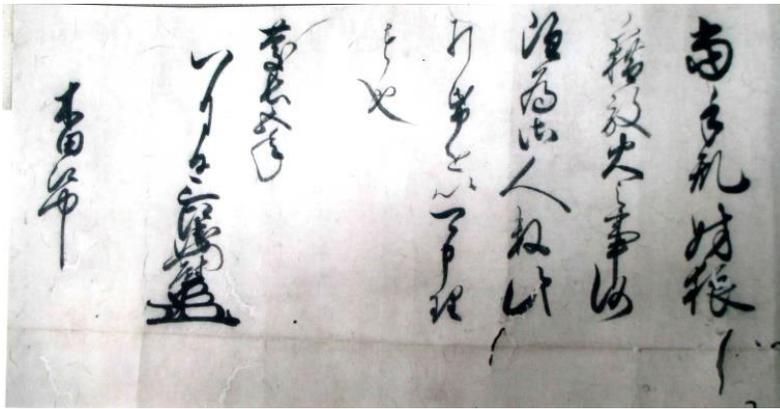


織田秀信の禁制(判物)  
『岐阜県史 史料編 古代・中世1』 144頁

### ◇ 木田郷中宛て池田輝政の禁制

慶長5年(1600)8月24日以降(岐阜城落城後2、3日中の文書)

岐阜市黒野『専長寺蔵』 撮影 2019.05.01 関谷太治



別府大学史学研究会(白峰旬著)  
『慶長5年6月～同年9月における  
徳川家康の軍事行動について』  
表6 禁制の一覧表より

已上  
 上手乱防狼  
 藉放火之事仍  
 何々雖レ為ニ御人数一此  
おりがみもつて、たなすものもうすべくなり  
 折紙を以可レ申レ理  
 者也  
 慶長五年八月 日  
 三左衛門尉 (花押)  
 木田郷中

### ◇ 関ヶ原合戦後 4カ村へ家康朱印状

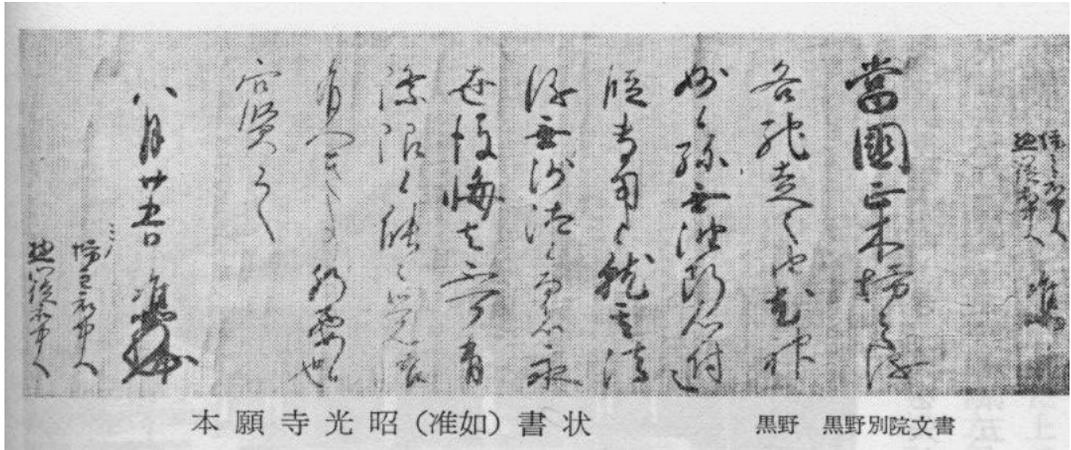
慶長5年9月23日  
徳川家康の禁制朱印状  
『岐阜県史 史料編』 408頁

一二四 濃州方県郡城田寺村外三カ村  
 ○東京大学史料編纂所影写本  
 禁制  
 一 軍勢甲乙人等、濫妨狼藉之事  
 一 放火之事  
 一 田島作毛刈取之事  
 付 剪採竹木事  
 右条々堅令停止訖、若於違犯之輩者、速可処嚴科者也、仍下知  
 如件  
 (徳川家康)  
 朱印  
 慶長五年九月廿三日

城田寺村  
 正木村  
 鷺山村  
 則武村

資料5

准如上人 正木坊の坊主衆・惣門徒衆宛書状



本願寺光昭(准如)書状

黒野 黒野別院文書

慶長9年(1604)8月25日 『岐阜市史 通史編近世』 680頁

十二 黒野別院文書 ○岐阜市黒野

一 本願寺光昭准如書状

(封紙ウハ書)  
「坊主衆中へ  
惣門徒衆中へ」

准如

當國正木坊之儀、各馳走之由尤神妙候、彌無油斷心付之段、専用候、就其、法儀無沙汰候而者、永世後悔者不可有際限候、能々覺悟有へき事肝要候也、穴賢く、

(慶長九年カ)  
八月廿五日

(光昭)  
准如 (花押)

坊主衆中へ  
惣門徒衆中へ

資料6

# 黒野村他32ヶ村112人連署書上<sup>かきあげ</sup>

慶長9年(1604)9月23日

『岐阜県史 史料編 古代・中世1』岐阜市 144~148頁

准如上人宛て 正木坊のこと、いかようにもふるまうと誓う33ヵ村112人の署名

九 黒野村外三十二ヶ村連署書上

○コノ文書、イマ原文書見ルヲ得ズ、シバラク、東京大學史料編纂所影寫本(明治二十八年)ニ據リテ採ル、

正木村御寺内ノ儀、何様共此賀判之者として御馳走可申候、

黒野村 秋野才次郎(花押)  
 同 助右衛門(花押)  
 河井太左衛門(花押)  
 河井喜兵衛(花押)  
 同 傳次郎(花押)  
 同 彌六郎(花押)  
 小左衛門(略押)  
 林 孫右衛門(花押)  
 同 喜右衛門(花押)  
 同 吉介(花押)  
 同 与三右衛門(筆印)  
 同 又助(花押)  
 中渡り村 神山助右衛門(花押)  
 矢嶋孫兵衛(花押)  
 与十郎(略押)  
 早田嶋村 舟付又左衛門(花押)  
 筑間善兵衛(花押)  
 山内彦市(花押)  
 矢嶋彌七郎(略押)  
 渡部与左衛門(花押)

ちつほむら 田嶋五郎右衛門(花押)  
 西郷村 岩佐源右衛門尉  
 田宮七右衛門尉  
 西垣市右衛門尉  
 中村 又右衛門尉  
 藤十郎  
 かいてん村 千藤又右衛門尉(花押)  
 長屋長右衛門(花押)  
 下河小右衛門(花押)  
 堀又右衛門(花押)  
 同 忠六郎(花押)  
 高橋惣兵衛(花押)  
 安田五右衛門(花押)  
 同 太兵衛(花押)  
 高橋又右衛門尉(花押)  
 同 清左衛門尉(花押)  
 同 十郎左衛門尉(花押)  
 三宅十左衛門(花押)  
 神原次右衛門(花押)  
 村瀬千助(花押)  
 山田助左衛門(花押)  
 芳賀傳右衛門尉(花押)  
 同 与兵衛(花押)  
 同 七介(略押)

西かいてん 同 忠六郎(花押)  
 高橋惣兵衛(花押)  
 安田五右衛門(花押)  
 同 太兵衛(花押)  
 高橋又右衛門尉(花押)  
 同 清左衛門尉(花押)  
 同 十郎左衛門尉(花押)  
 三宅十左衛門(花押)  
 神原次右衛門(花押)  
 村瀬千助(花押)  
 山田助左衛門(花押)  
 芳賀傳右衛門尉(花押)  
 同 与兵衛(花押)  
 同 七介(略押)

下立村 河井吉兵衛(花押)  
 同 藤右衛門尉  
 同 権右衛門(花押)  
 銅 村 松井次右衛門(花押)  
 同 彦右衛門(花押)  
 松井喜六郎  
 同 才 藏  
 古市場村 高井小右衛門尉(花押)  
 河井与兵衛  
 國嶋与右衛門尉  
 同 又左衛門(花押)  
 今川村 川井今兵衛  
 同 与左衛門尉(花押)  
 ましと村 郷 新左衛門尉  
 同 忠右衛門尉(花押)  
 同 喜右衛門尉(花押)  
 同 喜右衛門尉(花押)  
 同 小左衛門尉(花押)  
 いしかい村<sup>(右)</sup> 野々村甚右衛門  
 大野理右衛門(花押)  
 同 忠右衛門  
 同 喜右衛門尉(花押)  
 柴田 忠次(花押)  
 下鶴銅村 白木六右衛門尉<sup>[黒印]</sup>  
 まはせ村 福地勘右衛門(花押)  
 同 久兵衛(花押)  
 田 源 介(花押)

小山村 河田彌藤次(花押)  
 孫兵衛(筆印)  
 河田久三郎(花押)  
 孫十郎(花押)  
 次郎兵衛(略押)  
 助十郎(略押)  
 池上村 尾藤次郎左衛門(花押)  
 同 九郎右衛門(花押)  
 かやば村<sup>(堂)</sup> 宮田与三左衛門(花押)  
 栗本与六郎(花押)  
 同 与平次(花押)  
 飯嶋村 村瀬孫十郎(花押)  
 同 甚内(花押)  
 則竹村 栗本修左衛門(花押)  
 同 三右衛門(花押)  
 同 権右衛門(花押)  
 かきかせ村<sup>(柿ヶ懸)</sup> 郷 吉右衛門(花押)  
 彌 三(略押)  
 与右衛門(略押)  
 かぎりち村 坂口甚左衛門(花押)

同 原源七郎(花押)  
 同 山内 山忠右衛門(花押)  
 同 勝五郎(花押)  
 同 彌五右衛門(花押)  
 同 助左衛門(花押)  
 同 六右衛門(花押)  
 同 小嶋 四郎右衛門(花押)  
 同 金 太郎右衛門(花押)  
 同 福田 鳴孫兵衛<sup>[黒印]</sup>  
 同 林 後孫市<sup>[黒印]</sup>  
 同 宮部 山藤右衛門(花押)  
 同 惣兵衛(花押)  
 同 同 与左衛門<sup>[黒印]</sup>  
 同 藤八郎<sup>[黒印]</sup>  
 同 舟戸 吉藏<sup>[黒印]</sup>  
 同 桑原 又十郎(略押)  
 同 神山 戸藤次郎(花押)  
 同 佐藤四郎兵衛(花押)  
 同 同 三郎左衛門(花押)  
 同 神山 藤四郎(花押)  
 同 山田 孫助(花押)  
 同 山田 久右衛門(花押)  
 慶長九年九月廿三日





## 資料7

あ み だい じ  
西郷の阿弥陀寺由来と黒野御坊

西郷の歴史 昭和57年 1052・1053頁

「西郷の歴史」阿弥陀寺の項に黒野別院の記述があります。

西郷安国寺領(1528～1600)の頃は、織田信長の伯母が住んでいたということで、「西郷は御威光目をおどろかす」ばかりに栄えていたのであろう。しかも慶長5年(1600)岐阜落城、家康が加納に城を築き、松平美作守(家康の娘むこ)が加納10万石の領主となり、やがて、城主戸田丹波守が桑山智勝院に帰依して、菩提寺となるに及んで、阿弥陀寺村は繁栄した。この頃は、全ての附近の村々が、桑山御為めと称して、智勝院中心のくらしが始まったものようである。その頃、中西郷もやゝ町がかつて栄えていたので、阿弥陀寺を出町と呼んだ。

さて、このように歴史のあとをたどることが出来るのであるが、一体、阿弥陀寺という地名が、どうしてつけられたのであろうか。

「現在の第二学丘の南側(西寄り・山際)から南へ一帯の地名を阿弥陀寺と言う。一人の旅僧がこゝに来て、一字の坊舎を建て、この地に寺を建立せんと、喜捨を求めて近郷を勧進して廻ったが、病にたおれてその夢を果たさなかった。その後、此の僧の志しを継いだ人達が黒野の地をえらんで寺を建てた。それが今の黒野別院である。こうした因縁から此あたりの地名を阿弥陀寺とよび、部落の名も、それまでは出町と呼んでいたのを、いつの間にか阿弥陀寺と呼ぶようになった」という。

(黒野別院は天正5年の創建にかかる正木御坊が慶長15年、領主加藤貞泰の寺地寄進で黒野にうつり黒野御坊となっている。正徳4年・文政5年再建)

随分古い時代から、こゝは開けていたようである。現在、阿弥陀寺部落の北の方に南面して観音堂があり、その前が三叉路になっている。そこに、「左たにくみ みぎい志ら」と彫った石の道標がある。左の道は、西洞・上西郷・明音寺を経て、文殊・山添から谷汲に通ずる谷汲街道であり、右は中西郷・寺内・神屋・犬塚を経て、網代・伊自良・甘奈美寺に通ずる伊自良街道である。しかも南には東黒野から西黒野を経て揖斐に通じる伊尾街道があり、昔はせまい道路であったが、西郷を南北に貫き、東西に走る幹線道路があって、なかなかの交通の要地であった。



阿弥陀寺の三叉路から北方を望む  
2019.06.25 筆者撮影



道しるべ

### 参考

- ・近世初期頃の西郷(上西郷村など)は慶長5年(1600)岐阜城主織田秀信の落城までの70年間、安国寺領であったが、関ヶ原合戦後は加藤貞泰の領地となった。

『西郷の歴史』(草林むらかがみ)84、85頁

- ・僧の志を継いだ人達が黒野の地をえらんで寺を建てた人とは、加藤貞泰領の時、前述33ヵ村連署に出てくる西郷村の人達のことと思われる。

## 資料8

あ み だ い じ  
阿弥陀寺再興に黒野御坊の記述

## 黒野御坊の鐘の銘、教願寺住職の書

『大野市史』社寺文書編 第1巻 大野市 教願寺文書 84~97頁

令和元年7月下旬、西郷の歴史研究会の春日井伸一郎さんから、西郷の阿弥陀寺を調査中、黒野御坊の記述資料があると紹介があった。

・福井県越前大野市に浄土真宗本願寺派の教願寺あり。この寺の古文書に、教願寺は本所で本巢郡早野村（ときのむら）に隠居所の梅通院があり、教願寺第八世賢超が西郷の阿弥陀寺を再興するために、西郷村の武左衛門・安右衛門・安兵衛、広田郡上之得村（菴田郡上之保の誤記？）半左衛門、京へお供し願いが許されて則、加納城主松平丹波守へ訴訟し、谷汲海道の傍に6間半・7間の許可を得るも賢超は寛永13年（1636）往生。

・扱亦タ黒野御坊之鐘之銘先年者賢隆書之等。（原文）

・寛永16年（1639）、（正木坊が黒野へ移って28年後）第九世賢隆、弟少将、弟賢潤（12才）が西郷の阿弥陀寺小庵を改め6間・7間の本堂を建立するために材木等を調達し建立に及ぶとき、賢隆は阿弥陀寺の小庵にて病没する。材木等は黒野御坊へ引取りて御堂建立。今阿弥陀寺村に賢隆廟有り、印の木は松の大木で田処その辺りの字して院家前へ等呼ぶ、少将は大野郡宝来村仏照寺で卒す。賢淳15才の頃、家兄兩人ともに異境にて死去。故郷越前に帰るが、寺は火災で焼失。教願寺は一時無住になるもその後再興。

・第十世三男の賢乗、貞享3年（1686）、良如上人二五回忌上京御法着座の後、直に美濃国へ回在、黒野御坊相勤の義、色衣着用並びに政田村裏方の道場にて勸化いたすなど偏執によって段々不調法に相極まり、御寺内の花屋町徳力小兵衛方にて百日余りの禁足（賢乗23才）翌年3月追放され諸方流浪。

・元禄7年（1694）、美濃惣代西郷又左衛門・阿弥陀寺庄右衛門・曾家部市左衛門第十一世賢乗義美濃国にて願いが叶い、元禄9年（1696）本巢郡更屋敷村に小庵建立。

扱亦タ黒野御坊之鐘之銘先年者賢隆書之等、則県方郡西郷村之内阿弥陀寺ニ有リシ小庵於改メ、六間ニ、七間之本堂於建立シ、通寺之願ヒ材木等大略ニ調ヒ既ニ成就ニ及フ時、病氣頻リニシテ終ニ阿弥陀寺之小庵ニ於テ卒ス、此寛永十六己卯年八月廿四日、材木等者黒野御坊へ引キ取テ御堂建立、今阿弥陀寺邑ニ賢隆廟有り、印シ之木者松之大木田所其辺リ字シテ院家前へ等呼フ、少将者大野郡宝来村仏照寺ニ於テ卒ス、悲哉、賢淳十二歳ニテ賢超往生、十五歳之頃家兄兩人共ニ異郷ニテ死去ナレハ、漸ク志之同行於頼ミ故郷之越前へ帰リシニ、一寺者火難ニテ焼失、母妙源者門前之小家ニテ住居、此時ニ教願寺無住之体ナル故、伴僧某、蓮如上人之御骨於奪へ取ル、今裏方明源寺安置、誠ニ哀哉痛哉

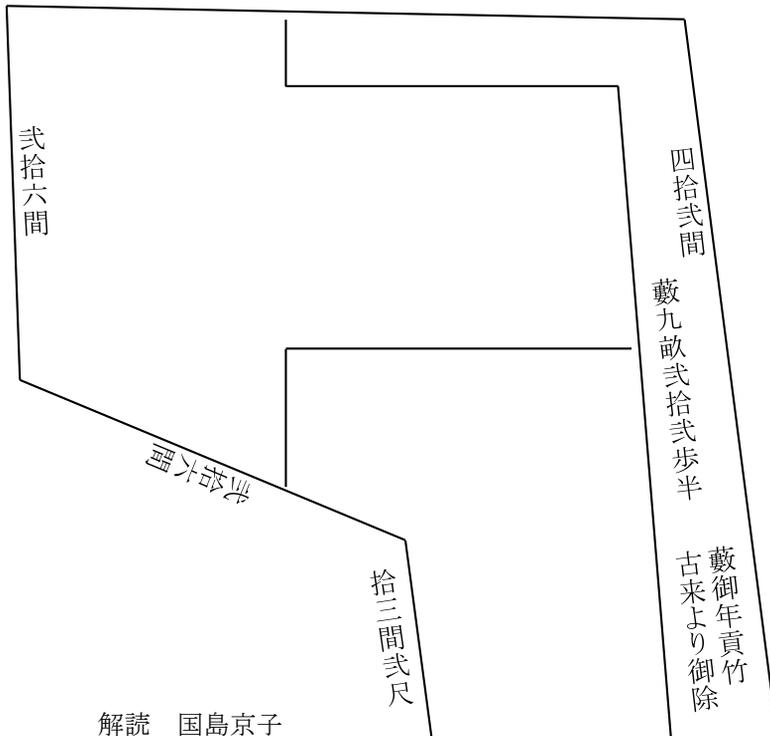
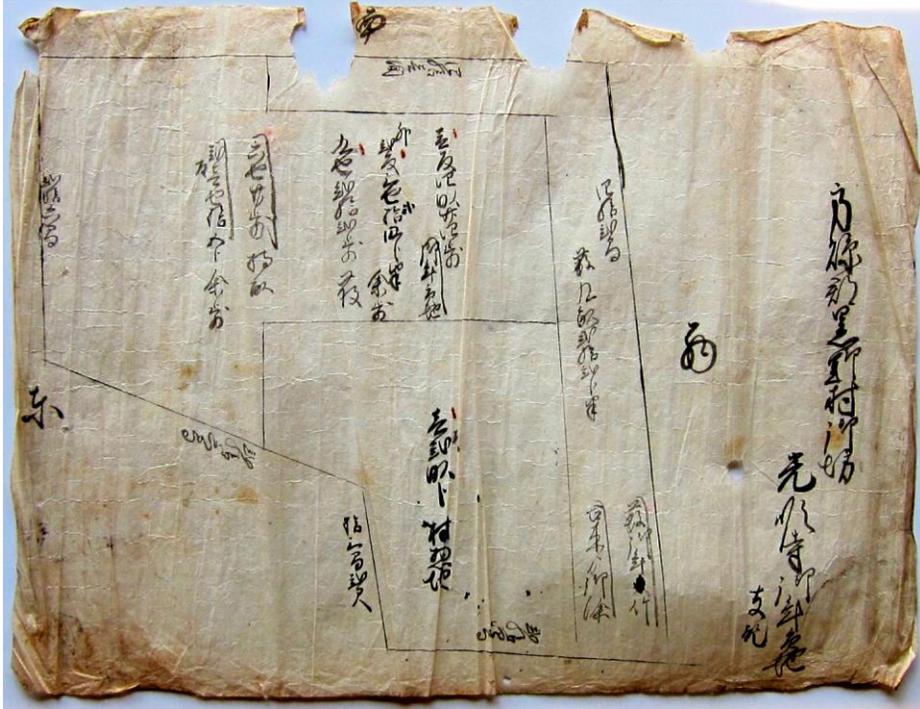
第九世賢淳者兄弟六人有リ、兄三人姉一人弟一人、中将少将者美濃ニテ卒ス、三男者早世、姉者幡州姫路梅原立庵室、弟者浄土宗西山派勢州ニテ、竿貞上人洛陽大宮錦小路久務寺ニテ逝ス、賢淳十七歳ニテ上京、得度之御礼繼目位階不相替恩免之上、年々美濃一國之中チ回在、法

資料9

# 方縣郡黒野村御坊 光順寺御年貢地

延享年間(1744~1747)作成(他同類図の作成年代より)

『黒野 玉木和廣氏蔵』



解説 国島京子

資料10

黒野御坊・岐阜御坊入組につき願書

『岐阜市史 史料編近世2』 491頁

(入組: すつきりしない・いざごぞ)

二二 郷文書

○岐阜市文人 郷雄次郎氏所蔵

一 黒野・岐阜両御坊入組につき願書

乍恐以口上書奉願候御事

今度岐阜御坊より御願被申上候訳、黒野御坊御焼香講御廻在之節、御使僧様を黒野触下と岐阜触下と猥ニ為入込候ては、岐阜十六日講之障ニ相成候段、向後兩触下猥ニ入込ニ不申候様ニ御願被申上候ニ付、御書翰御差下シ被為遊、依之先達て同行為惣代三人、以口上書を御願申上候処、御取次大野文藏殿宜敷御聞届被遊候て、黒野光順寺と岐阜願正寺と対談之上にて、事相済シ候様ニと御書翰御差下被為遊候御事

黒野御坊御由緒之儀は、往古正木御坊と申節、美濃国中正木御坊之御触下斗にて御座候御事

一 信長公御墨印

一 東照大権現公御朱印

右 御両公様御朱印頂戴罷在候

黒野御坊之儀は、古来准如上人様より当国正木坊御馳走ニ付、御褒美之御書、美濃惣坊主衆中惣門徒衆中中と被成下頂戴仕候上は、一国之人民、他宗之道俗達迄も被致尊敬、何方えも任御招請御供仕候

四九一

に、慮外仕候もの不承及申候、岐阜御懸所御建立御ニ付、兩触下と分れ申候、岐阜は繁地にて万事自在キを捨て新きを好む人心にて、御一宗道俗共ニ岐阜致候て、黒野貧地之御坊えは御出仕之寺方も可有、式・三拾ヶ寺斗ニ御座候、此度御焼香講御使僧様を入込不申候様ニと、新規之御願被申上候儀、御聞届付候、於岐阜御坊は触下切と御願申、御書様停止被奉得其意候、十六日講ニハ指障候儀も可有御座候、ニも十六日講障候儀も有之候得共、畢竟兩講共ニ仏且は御所様之御為共奉存、此方よりハ一切不申出候右准如上人様始御代々之御書様、一国無滞御廻在被岐阜御坊任願ニ御停止被遊候儀、歎敷儀ニ奉存候、書様被任御招請、何方えも御使僧様御廻在被遊被下ニも御願申上候、以上

1752年

宝曆二年

申之八月日

下間少進法印様  
下間宮内卿法眼様  
上田 主殿 様

美濃黒野御坊御肝煎同行

正木村

黒野町

山田与三

安田善十

高橋奥十

山西郷村

高橋奥十

前々之通御  
候様ニ幾重  
二右衛門  
左衛門  
右衛門  
成就被成候  
三候故、古  
御坊尊敬被  
出家中纏ニ  
岐阜触下え  
届被遊被為仰  
致候儀、不  
併御焼香講  
法之いざごぞ、  
被遊候儀を、

資料11

# 光順寺と隣接の月照院 境界争いの記録

『崇福寺史』平成22年(2010) 横山住雄著 長良福光崇福寺 東海康道発行 315・316頁

## ②月照院(岐阜市黒野)(廢寺)

宝暦五年(一七五五)七月の月照院宗甫の書上げによれば、月照院は天正年中に栢堂が隠居した古跡で、廢壊したため寛永年中に再興したという(古十五一一八)。

東大『雜華院要記』<sup>四</sup>に、「崇福末寺月照院先住自照首座追贈」の記事があり、延享三年(一七四六)に「座元」位を追贈された時の願い書が収められている。

奉願追贈前板軀位之事

一、濃州方県郡黒野邑月照院先住自照首座者、於某院興立之功作最不為不多矣、此旨被歴陳開山諸大和尚洎諸位禪師之高聽、追贈前版軀降賜所仰望也、誠恐敬白、

延享三丙寅春正月十五日

同州同郡黒野

月照院惠欽書判

拜晋雜華院侍右

濃州長良方県郡

崇福寺玉泉惠崑書判

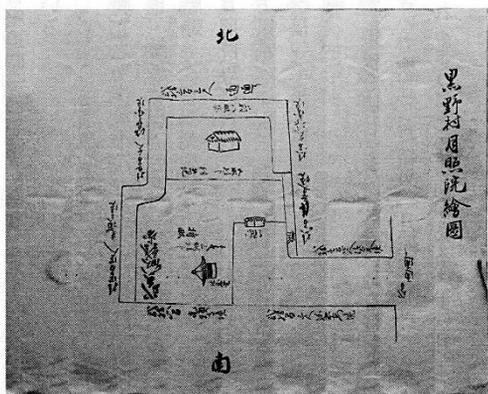
職状日付正月廿八日、号天心諱自照、官錢等如前、

宝暦五年(一七五五)、住職が外出中に、隣の光順寺が、垣根を壊して月照院の敷地を侵したので、加納役所へ願い出た(七月頃)。八月には、村役人も立合いで検証した結果、月照院の言い分が通ることになったので、本寺(崇福寺)から添書きをしてくれるようにとの書面がある(十一月)(古十五一一一)。

月照院は光順寺の東隣にあり、月照院との境目は天正年中頃より決まっており、月照院は寛永七年に松平丹波守へ願い出て再建したものである。光順寺は、方県郡正木村より慶長年中に移って来たものである。今回境目が決定したものの、光順寺が承服しないので、決裂するとの一札がある(亥八月)(古十五一一二)。

境目には土塁(土居とあり)と堀があり、土塁は月照院、堀は光順寺と決まっていたものである(宝暦七年(一七五七)五月二日「月照院境内西境論記録・全」(古十五一一四))。

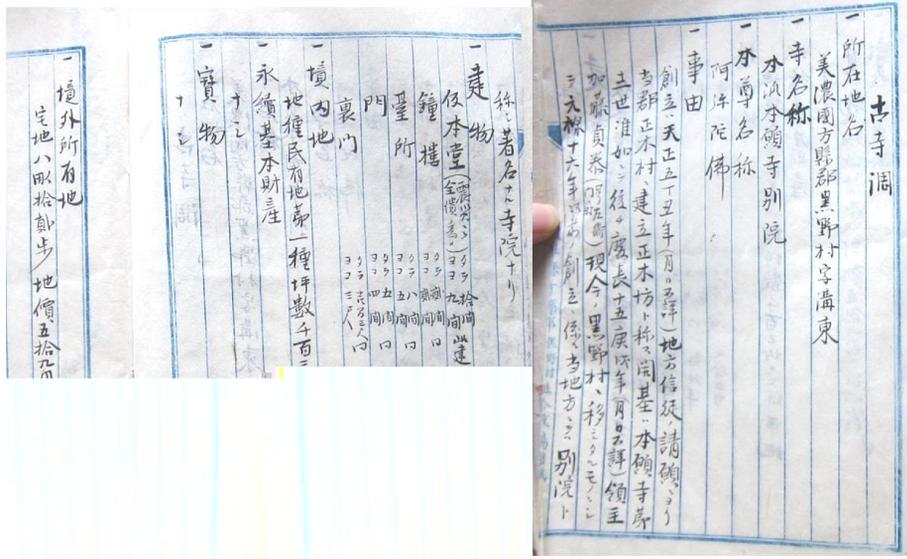
明和九年(一七七二)正月の一亩百五十年忌香資目録に、月照院了清が六分を拠出している。(古五一二一九)。その後の動向は、崇福寺に記録がない。また『黒野史誌』寺院の条には、月照院についての記述は全く見られない。



「月照院境内西境論記録」の付図(崇福寺蔵)

資料12

古寺調 本願寺別院



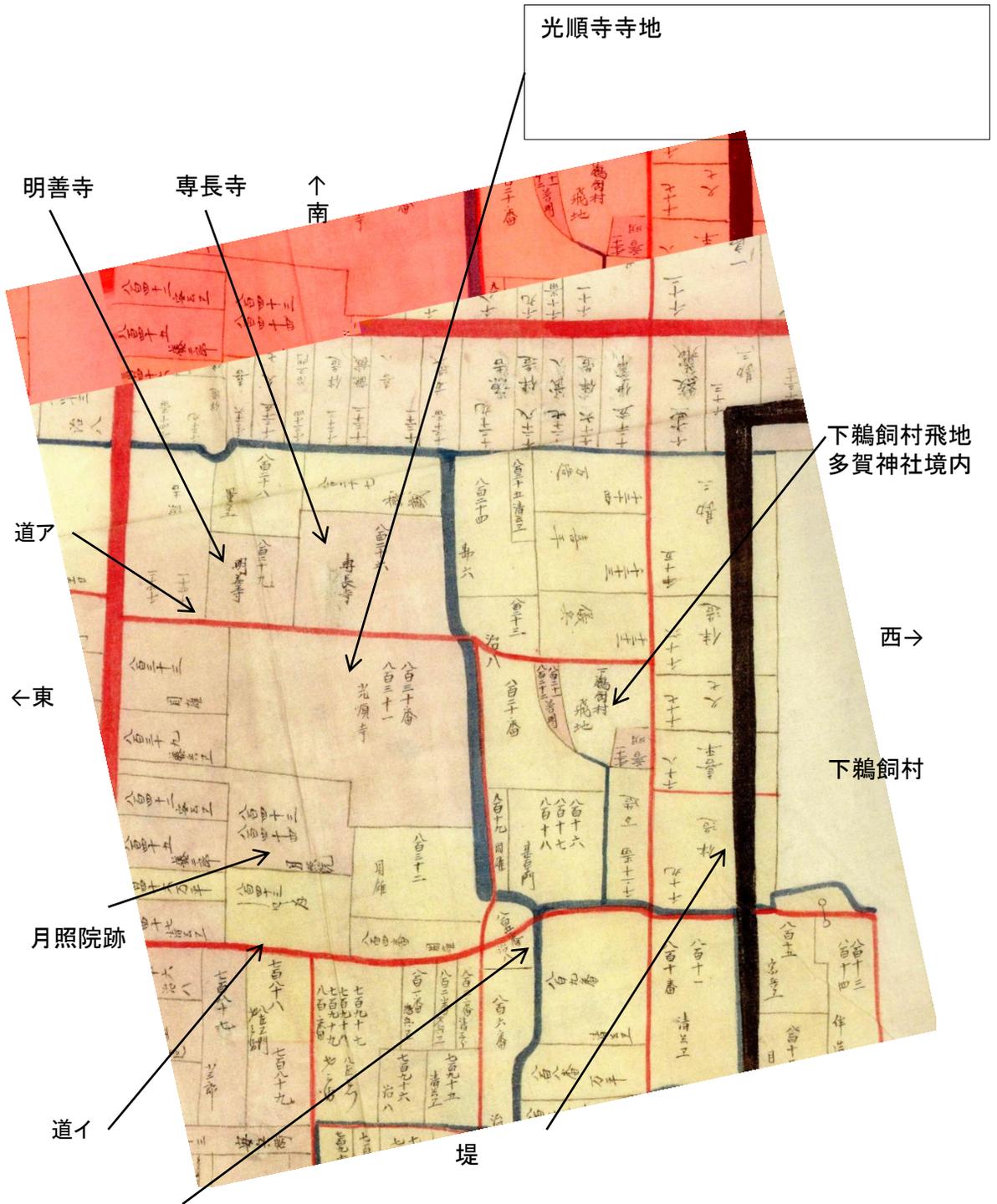
明治23年1月4日(1890) 社寺に関する願伺届書綴  
黒野村外七ヶ村組合役場 『多賀神社蔵』



資料13

明治6年(1873)の黒野村絵図(部分)

「明治23年(1890)郷喜蔵写之黒野村絵図」の部分 『黒野郷和彦氏蔵』  
(黒野村は、明治6年改正図面新調と記載あり)





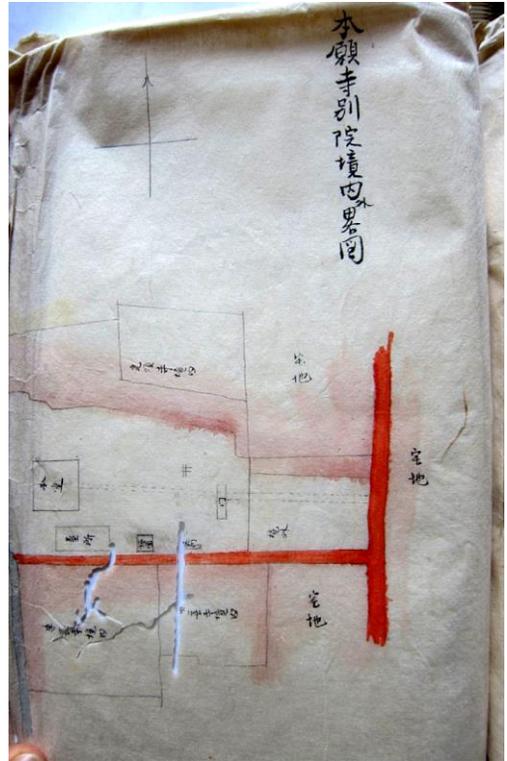
資料14

# 明治時代の黒野別院図

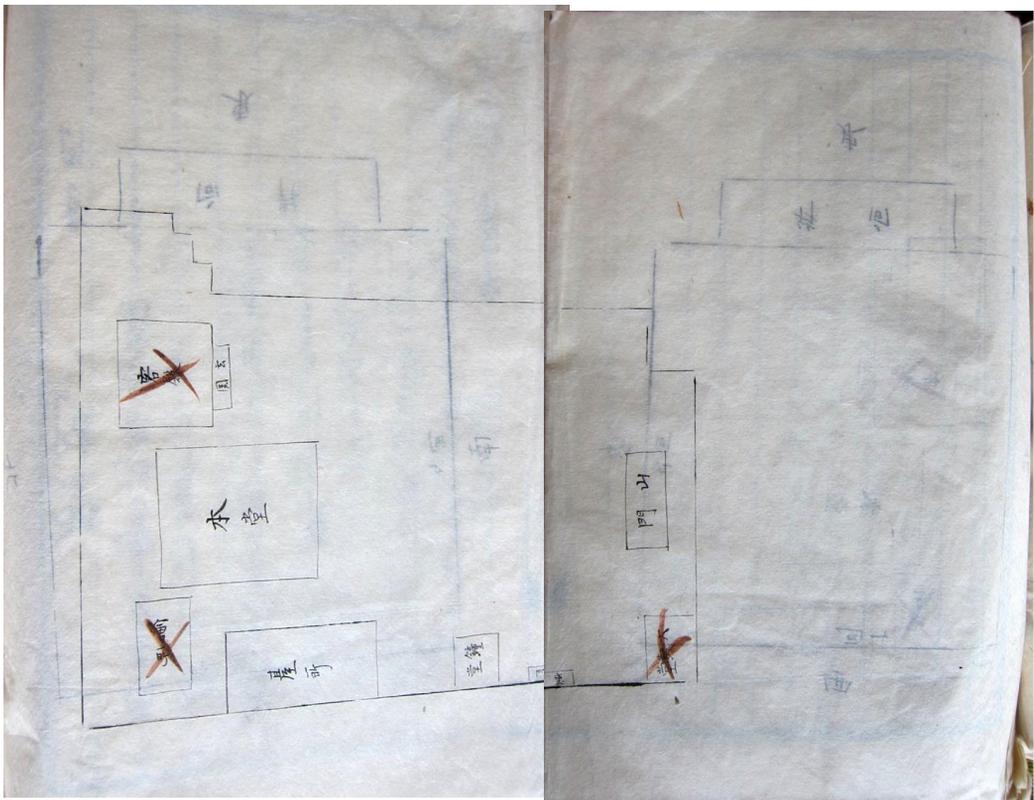
明治23年(1890)1月4日  
社寺に関する願伺届書綴  
黒野村外七ヶ村組合役場  
『多賀神社蔵』



黒野別院見取り図



本願寺別院境内・外 略図



×印は届出翌年の明治24年(1891)濃尾震災で倒壊した建物と思われる。

資料15

絵図に見られる掛所など



黒野城下家中屋敷図 [明治28年(1895)12月写]部分  
『黒野 玉木和廣氏蔵』

考 察

資料16

# 光順寺

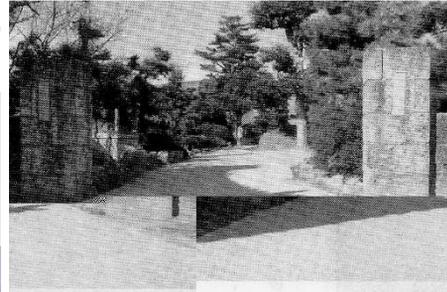
## 黒野御坊舎の留守居役を勤める

### = 黒野別院の山門・鐘楼を移築 =

『黒野史誌』昭和62年(1987) 1295頁

その時本願寺准如光昭から光順寺の寺号をうけた。慶長一五年(一六一〇)正木坊舎の黒野への移転の時には、黒野へ随従し黒野御坊舎の留守居觸頭を勤め、明治一〇年(一八七七)まで続いた。明治初年の寺院明細帳には檀家二〇〇戸をもち、黒野では最大の寺であった。光順寺現住職は加藤洋文。

光順寺 九年(一六三二)教  
浄土真宗本願寺 山田六右衛門より徳  
持山光順寺。現在  
当寺は黒野別院の  
正木坊舎のできた  
寺教覚の次男徳念  
いたが、寛永九年  
寺住職善秀と山田  
徳念が坊の世話を  
の留守居職を願い出て許された。



黒野光順寺



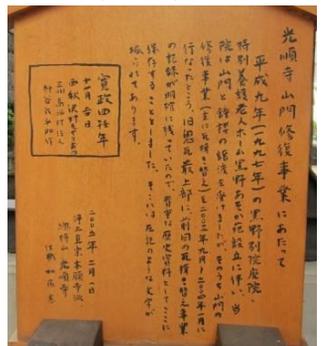
本堂と鐘楼 平成31年(2019)3月 筆者撮影



昭和43年(1968)3月  
本堂落慶法要  
光順寺提供



山門 隣の黒野別院から移設  
平成31年(2019)3月25日 筆者撮影



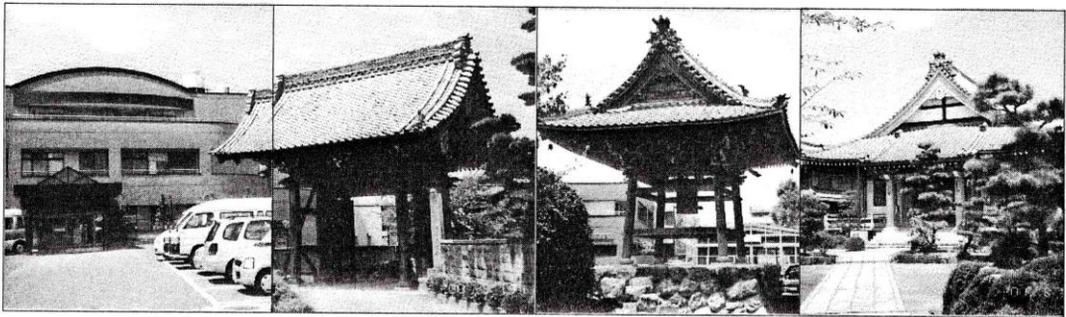
旧山門鬼瓦 平成16年(2004)修復記念



鐘楼 隣の黒野別院から移設  
平成31年(2019)3月 筆者撮影



『岐阜県仏教会寺院名鑑』 光順寺 平成13年(2001)発行 178頁



特別養護老人ホーム  
黒野あそか苑

当院山門  
(元・黒野別院)

当院・鐘楼  
(元・黒野別院)

当院本堂

### 總持山 光順寺

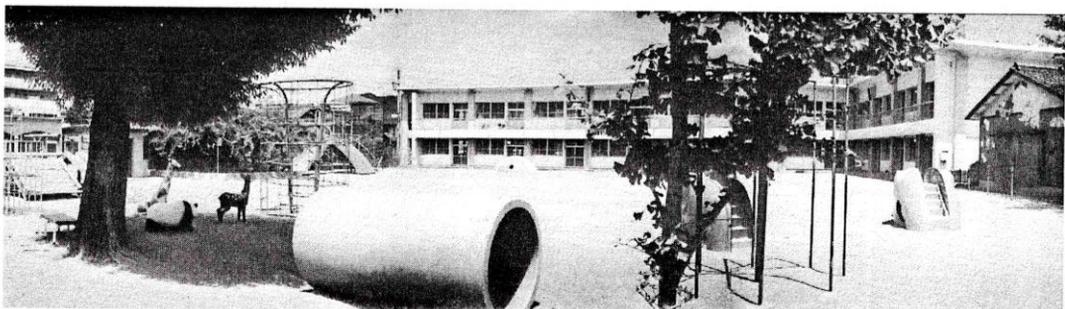
#### 光順寺の由来

往古、方県郡木田村に、天台宗の福満院があったが、度重なる水害のため、隣村正木村の庄屋、岐阜中納言の家中梶田甚太郎が、阿弥陀如来像を背負い、自身の屋敷へ迎え、草庵を建てて朝夕のお給仕を尽くした。梶田甚太郎亡き後、山田孫助が梶田家を相続し庄屋となり、正木村垣内に飯堂を建て御本尊を奉安し正木坊と呼び、四囲の隣人の参詣する所となった。

松平下総守の家中、加藤為長、岐阜落城となるや、剃髪し仏門に帰依し、天正元年、庄屋山田孫助、加藤為長を迎え、本尊像のお給仕役をする。山田孫助一家をあげて垣内に本堂伽藍を建立し、正木坊と呼び、四隣の道俗、善男善女、参詣する。

本願寺第十二世准如上人、関東下向に際し正木坊にお立ち寄りになり、加藤為長、上人に帰依して得度を給い、専教と法名を賜ると共に、天台宗から浄土真宗本願寺派に改宗転派する。

正木地内は、長良川、伊自良川の度々の氾濫、水害に悩まされ、慶長十四年(一六〇九)黒野城主加藤左衛門慰貞泰、特命し正木坊を黒野村に移転させ(現在の黒野別院の地)同十七年堂宇伽藍落慶する。以来、黒野御坊又は住職の名を取り専教坊とも呼ぶ。寛永九年(一六三二)本願寺第十三世良如上人の御巡教あり、寺号を光順寺と授賜され、本願寺御留守居職(出張所)を代々拝命し、明治十年、黒野別院設置に協力、堂宇伽藍を本願寺に寄附し現在の地に光順寺庫裏御堂を建立した。



光順寺住職が理事長、園長を務める仏教園ひかり幼稚園

光順寺住職が理事長、園長を務める仏教園ひかり幼稚園

資料17

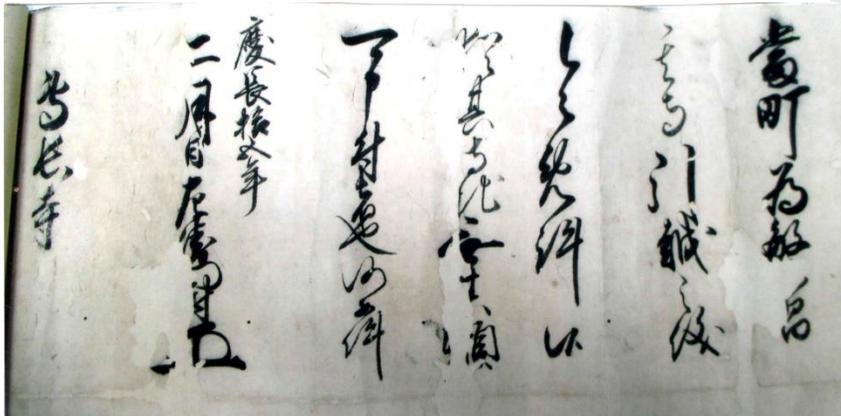
# 専長寺 貞泰、黒野城下への引越を許可



専長寺 平成31年(2019)3月25日 筆者撮影  
—専長寺系図・由緒より—

『黒野史誌』昭和62年(1987) 1294頁

、専長寺  
 浄土真宗本願寺派。山号恵日山。この寺は文明年間、木田村の山田小太郎重久が蓮如兼寿に帰依して創建したもので、重久は法名を善正といった。  
 山号は西輪山と称し二世西正の時、永正一七年(一五二〇)寺号を専長寺と改め四世善正の時、慶長一五年(一六一〇)黒野城主より城下町の繁昌のため移転を請われ(専長寺文書)黒野別院南に引越した。寺は願誓寺の末寺である。  
 現在職・山田良豊。  
 明治一二年(一八七九)古市場村は会合を度々黒野専長寺で開いているが、席料としてその都度二銭を支払った。(国島龍一)当時、寺が集会所であった。



慶長15年(1610)2月 専長寺宛 加藤貞泰書状『専長寺蔵』  
本書16頁「寺の引越し」原本(本書で初公開) 2019.05.04 関谷太治撮影

當町為繁昌  
 其寺引越之儀  
 令免許候  
 猶其寺地無  
 其煩可申付者也  
 仍如件  
 慶長拾五年  
 二月日 左衛門尉 花押  
 専長寺



資料19

# 安養寺(鷺山)

## 黒野別院の鐘楼 昭和6年(1931)に移設

『鷺山史誌』1989年 123・124頁

楼は黒野御坊より古鐘堂を分譲受け移築、安土・桃山の物と言われ、当時の建築様式が残されている。昭和6年(1931)、十五代行順に移築。

山門はこれも建築年代は不明であるが、昭和7年頃大修繕され、鐘楼門で門の上に大鐘が吊されていた。この鐘は陣鐘であったが、第2次世界大戦のために供出してしまった。  
(岩佐恵雲 記)

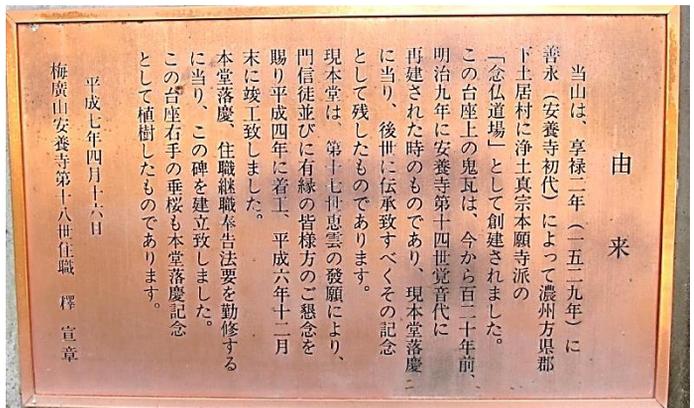


安養寺(昭和62年、天野敬也氏提供)

### 安養寺訪問

### 写真 『鷺山史誌』

「鷺山史誌」の安養寺(浄土真宗本願寺派開基年号 天正2年(1574))の頁に、黒野御坊の古鐘楼のことが書かれているので、鐘楼が現存しているのか確認に青山中学校西の安養寺を訪問。



### 由来

当山は、享祿二年(一五二九年)に善永(安養寺初代)によって濃州方県郡下土居村に浄土真宗本願寺派の「念仏道場」として創建されました。この台座上の鬼瓦は、今から百二十年前、明治九年に安養寺第十四世覚音代に再建された時のものであり、現本堂落慶に当り、後世に伝承致すべくその記念として残したものであります。現本堂は、第十七世恵雲の發願により、門信徒並びに有縁の皆様方のご懇念を賜り平成四年に着工、平成六年十二月末に竣工致しました。本堂落慶 住職職職奉告法要を勤修するに当り、この碑を建立致しました。この台座右手の垂桜も本堂落慶記念として植樹したものであります。

平成七年四月十六日

梅廣山安養寺第十八世住職 釋 宣章

### 山門



### 現在の鐘楼



資料20

教徳寺(西改田)

太鼓堂の長胴太鼓・黒野別院から移設

浄土真宗本願寺派 般若山教徳寺。

天平年間(730頃)行基菩薩、大和国般若院教徳寺を創設。寿永2年(1183)、当寺が平氏に与したと木曾義仲の焼き討ちに遭い、住僧が行基作とされる本尊を背負って美濃開田の山田隆善のもとに。文治年間(1185~1190)隆善は芝原村に敬徳寺建立。文安元年(1444)頃、本願寺蓮如上人に帰依し天台宗を改めて浄土真宗になった。

加藤貞泰が黒野城を築城中に仮住まいしていた屋敷跡(山田之城)、黒野城完成後は近くの芝原から敬徳寺が当地に寺基を移し教徳寺となり現在に至る。

教徳寺の住職教覚の次男徳念は正木坊の世話をしていたが御坊の留守居役を勤めた。

昭和55年(1980)太鼓堂大修理の頃に、昭和34年(1959)の伊勢湾台風で倒壊した黒野別院太鼓堂の太鼓を移したという。



西改田の教徳寺(浄土真宗)



太鼓堂



昭和38年頃(1963)



太鼓を説明の先代山田住職  
平成23年(2011)11月撮影



山門前の石橋 今は境内庭石に4本

同四黒方  
行番野県  
中地口郡  
(村)



太鼓上面に「掘田新五郎」の銘板あり  
(愛知県津島市で900有余年の老舗太鼓屋)





資料21

# 石碑碑文 本願寺黒野別院の沿革

## 黒野別院跡(「あそか苑」)



**本願寺黒野別院**

沿革

天正五丁丑年織田信長ノ臣梶原甚太郎の從弟山田孫助ナル者本願寺第十一代頭如上人帰依シ美濃正木村ノ地(正木坊ト名稱ヲ賜ル)ニ創建スソノ後頭如上人御遷化ノ後第十二代准如上人ノ末錫アリテ消息ヲ下シテ隆昌ヲ計ラル歴代ノ宗主消息ヲ下シテ義相統ヲス、メ給フ領主加藤貞泰号左衛門尉水害ノタメ現在ノ地ニ移転ス時ニ慶長十四庚戌年ナリソノ間盛衰アリト云ヘドモ佛祖深恩崇敬及徒ノ念力ニ依リ今ニ及ブ

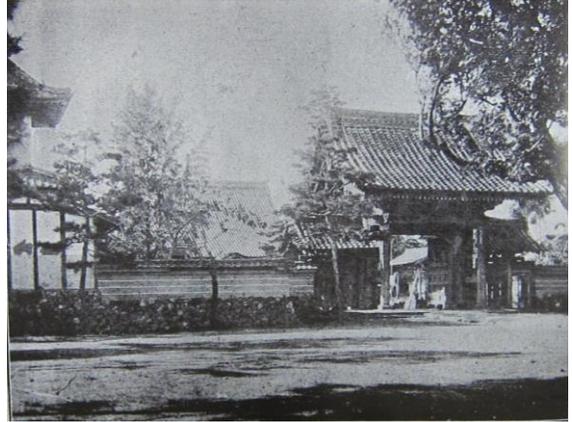
昭和50年(1975)に黒野別院に設置されていた石碑が、平成8年頃(1996)あそか苑の建設で岐阜別院(西別院)に移っていたが、平成28年(2016)末に研究会の関谷太治が発見。その後、あそか苑様に研究会から移設願書を提出し、あそか苑様のご厚意とご尽力にて平成29年(2017)3月、黒野別院跡に甦った。石碑の建立は昭和50年(1975)9月で、当時黒野在住の河合石材加工所の河井瑩爾(えいじ)氏が造園施主のひとりで、この縁もあり、移転後に徳風院石碑の河井氏の御協力でご白文字塗り入れした。裏面には寄進者名などが彫られている。

資料22

昭和・平成時代の黒野別院



伊勢湾台風で倒壊した黒野別院の太鼓堂  
昭和34年(1959) 撮影 国島 秀雄



本願寺別院 黒野村  
岐阜伊奈波梶田写真館(撮影年月不明)



廃寺が決まった黒野別院 山門(左)と鐘楼(右)  
平成7年(1995)12月8日 撮影 河口榮一

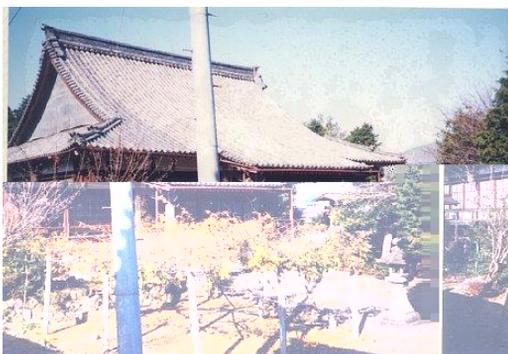


太鼓堂



平成7年(1995) 撮影 関谷太治

別院前広場と山門



本堂



本堂

平成7年(1995) 撮影 関谷太治



太鼓堂



太鼓堂

平成7年(1995) 撮影 関谷太治



明治42年3月建立の銘



山門 境内から望む



忠魂碑



鐘楼



忠魂碑

平成8年(1996) 解体前 城田寺の法勝寺住職撮影(関谷太治提供)



黒野別院前広場と山門



山門



本堂



本堂



本堂正面の木額



平成8年(1996)9月23日 移動した山門  
関谷太治撮影



平成23年(2011)11月13日 筆者撮影



平成23年(2011)11月2日 筆者撮影



平成29年(2017)4月10日 筆者撮影  
右側の石碑は西本願寺に移転していたが平成29年、あそか苑のご協力に戻る



平成26年(2014)5月28日 筆者撮影

資料23

正木村

『岐阜県の地名』 平凡社 510頁

正木村 ⑧岐阜市正木

下土居村・鷺山村の西に位置し、南部を長良古々川が流れる。主集落東正木は東端の鷺山西麓にあるが、支郷西正木・南正木は村南西隅にある。西境は旦川、北境は鳥羽川で、長良川の支流で低平なため、長良川が出水すれば激しく逆流した。天正十一年(一五八三)七月、岐阜城主池田元助は「正木郷」に禁制を下している(池田元助禁制「山田文書」)。

慶長四年(一五九九)三月二十七日、織田秀信の家臣木造長広は正木村には代官がないため、年貢収納を同村の山田孫助に申付けている(「木造長広所務申付状」山田文書。関ヶ原の合戦直前の翌五年八月、秀信が「柿内正木郷寺内」に(織田秀信禁制判物)同文書、また直後の九月二三日には徳川家康が当村など近隣四ヶ村に禁制を下している(「徳川家康禁制朱印状」同文書。正木郷寺内とは、当地垣内に天正五年創建された正木御坊(浄土真宗)にあたる。同坊は慶長一五年黒野村に移され、黒野別院と称された。慶長九年と推定される八月二五日の本願寺准如書状(黒野別院文書)によれば、正木御坊に関する美濃の坊主衆・惣門徒衆の奔走に対する礼を本願寺准如光昭がしている。同年九月二三日、当村の山田孫助ら三三ヶ村・一一二人の門徒は、「正木村御寺内」につき奔走を申合せている。三三ヶ村とは当村のほか、黒野・長良・中渡り・早田島・下立・飼・古市場・今川・ましと(交入)・いしかい(石谷)・下鶴飼・まはせ(馬伏)・ちつは・西郷・中・かいてん(改田)・しはわら(芝原)・西かいてん(西改田)・賀茂・尻毛・はね・小山・池上・かやは(萱場)・飯島・則竹・かきかせ(柿ヶ瀬)・かきうち(垣内)・こんかう寺(金光寺)・いもし屋(鎗物師屋)・まくわ(真桑)・ひこさか(彦坂)の各村である(「黒野村外三十二ヶ村連署書上」山田文書)。

慶長郷帳に村名がみえ、高六五九石余(旗本日根野高継領と高七五石余(幕府領大久保長安支配)の二筆に記される。元和二年(一六二二)の村高領知改帳でも旗本日根野領と幕府領の二給。同五年幕府領は尾張藩領となって幕末に至る。旗本日根野領は、寛永年間(一六二四―一四四)加納藩領になったとみられるが、宝暦五年(一七五五)同藩領は大垣藩預所となり、さらに同一三年幕府代官の管下に置かれ幕末に至った(岐阜県史。正保郷帳では高七五二石余、うち田八二石余・畑六六六石余・紙桑木高一石余。旧高田領取調帳によれば幕府領八二〇石余・尾張藩領七五石余。「濃州徇行記」に「南正木は長良川の古川通南の方へつかり、東正木村は古川の北鷺山村界にあり、西正木村は古川の北へ付村西伊自良川と板屋川の落合の処」とあり、西正木は幕府領、南正木と東正木は幕府領と尾張藩領が入交じるとする。

尾張藩領は明暦覚書によれば概高六一石余、人数四三、馬二。取水・井普請は加納藩領と立会で行った。「濃陽志略」では家数三五・人数一七七。神祠として白山権現、寺として心洞寺(現臨濟宗妙心寺派)・影現寺(現浄土真宗本願寺派)を記載。「濃州徇行記」によれば反別三町八反余、家数三三(南正木二七・東正木六)・人数一五三、馬九。純農村で、用水は鳥羽川から引いた。竹木が茂り、竹は名産とされた。一方、天保六年(一八三五)当時の幕府領は田五町六反余・畑三二町余、新畑一八町余、家数二二・人数四三二、馬六。宮と寺は前述した尾張藩領と重複するほか、貴船明神・天白神明・齋宮司・秋葉堂・庚申堂を記す。馬船一・作船一。且川は「クリフネ」で往来の人を渡した。長良川は石砂川で平時は歩渡りしたが、増水

時は村中輪番で船越した。郷蔵一、土橋・板橋一二。長良川の堤が築き捨てであるため、出水すれば川々が逆流し、集落・耕地が浸水し苦しむ水損所であった。農間は男は縄・俵作りや草刈、女は木綿を織った(村明細帳。天保六年、当村は逆水を防ぐため新しく小土手を築くこととなり、鷺山・上土居・中福光・上福光・真福寺・岩崎の障り六ヶ村と迷惑をかけない旨の約定書を交わしている(大野文書。しかしその後もしばしば氾濫に襲われていたことが知られる(坂口文書など)。



- 一 郷藏 老軒
- 一 当村之儀は、里方ニて、土は砂交り、市場は無御座候
- 一 長良川通当村之内 八百九拾間程  
但シ石砂川平水歩渡り、水増候得は、村中廻り番ニ船越し申候、右川両方共御堤御普請所ニて御座候
- 一 且川通当村之内 千式百間程  
但シ往来くりふねニて渡し申候、右川端田畑田ニ御普請所御座候
- 一 船 式艘  
但シ老艘は馬船ニて、且川通りニくり船ニ致シ、往来之人渡シ申候、老艘は作船ニて、長良川通ニ御座候
- 一 坑 七ヶ所 御普請所  
但シ悪水落式ヶ所 用水坑五ヶ所
- 一 井 式ヶ所 下土居村分  
但シ早損之節は、下土居村・下城田寺村・当村尾州御領共ニ、立会ニてせぎ申候
- 一 井溝 六ヶ所  
但シ内式ヶ所当村境より下土居村分之内、是ハ当村尾州御領ニて、下土居村前迄さらへ申候
- 一 悪水落 四ヶ所
- 一 土橋・板橋 拾式ヶ所
- 一 当村東西七町余 南北九町程 川原川共
- 一 漁猟殺生仕候者無御座候  
但シ当村長良川通・且川通尾州御領立会ニて、鵜匠之外前々より、他村之殺生人入れ不申候

- 一 米式斗は、井米下土居村え遣ス
  - 一 米式斗は、以上ヶ下ヶ給下土居村え遣ス
  - 一 石番給 日野村え遣ス
  - 一 西本願寺御坊居地垣内と申所ニ御座候、先年川欠ニ
  - 一 古城跡 但し山ニて御座候、齋藤山城守道三殿城跡
  - 一 候、先々より銘々屋敷通りニ被下置候
  - 一 男女稼之儀は、農業之男は、縄・俵或は草苧、田畑門
  - 一 仕候、女は布・木綿着用ニ仕候
  - 一 百姓薪之儀は、十月より来四月迄四里奥伊自良谷ニ
  - 一 当村之儀は、早損・水損所ニて御座候、居村三ヶ所
  - 一 長良川村中カを通り、伊自良川・鳥羽川・板谷川ニ罷成申候ニ受、当村地内ニて落合申候、尤長良川通川表ニ御跡ニて御座
  - 一 て下ニ無之候故、雨天之節は、以上四筋之川々水湛
  - 一 御田地・居村え押開キ水損仕候、御田地え通ひ候ニ畑之養ひニ
  - 一 川平水ニは歩渡り、少々水増候得は、船ニて通路仕
  - 一 く難儀之村方ニて御座候
  - 一 て買申候
  - 一 右之道当村高反別并有来り候品、明細吟味仕、書上候ニ相分レ、
  - 一 御座候、以上 三筋ヲ北西
- (1835年) 天保六年未十一月
- 濃州方縣郡正木村 庄屋 御堤築捨ニ  
与三右衛門合逆水仕、  
九郎右衛門も、長良  
年寄 年寄  
与兵衛 衛門  
百姓代 十之右衛門
- 笠松 御役所

## 資料25

## 正木坊のルーツ 木田の福満院

研究会 関谷太治調査

## 『光順寺由緒』

往古、美濃の国方県郡木田村地内に天台宗所属の福満院があり、度重なる水害の為、寺は荒廃しておりました。弘治元年（1555）、未曾有の大水害により、流出の危機にあいました。隣村正木村の庄屋、岐阜中納言の家中、梶田甚太郎、阿弥陀如来御本尊像を背負い、我が屋敷へお迎えし、草庵を建て、朝夕の参詣お給仕怠らず。梶田甚太郎亡き後、山田孫助梶田家を相続し庄屋となって、正木村垣内地内に仮堂を建て、阿弥陀如来を奉庵し正木坊と呼び、四圍の隣人参詣する。

木田には往古から福満神社がある。福満院と同一名で因果関係がありそう。おそらく神社境内付近に福満院が存在したと推定する。



福満神社(木田)

福満院は神社付近に存在したと推定  
2014.12.13 関 谷太治津影

## 資料26

## 木田の総仏堂と 正木の総仏様 ＝黒野別院と縁＝

研究会 関谷太治調査

### 『ふれあい鷺山 第22号 加納宏幸記』

木田の柿ヶ瀬公民館に総仏堂がある。総仏様と名付け阿弥陀如来を祀る。正木南公民館にも総仏様という法要が最近まで続いていた。南正木に伝わる話によると、大水によって流されたご本尊の行き着いた所に黒野御坊が建立されたのだといひます。その証しとして、毎年冬至に「総仏様」という法要が、南正木公民館で取り持たれています。

追記：木田の柿ヶ瀬公民館は再建されて総仏堂と同居、今もお参りが続いている。



平成30年(2018)4月 Google Earth衛星写真



木田 柿ヶ瀬公民館内の  
総仏堂

2014.12.01 関谷太治撮影

## 総佛様『鷺山史誌』1989年 752頁

無縁佛の供養をする為毎年12月22日(冬至)に寺僧を招いて法要を旧町内約45名で行う。この始まりは、山田慶左という人が、自分の田を寄附し、その年貢で行われてきた。その条件として教徳寺の住職に御書を読んでもらう為、黒野別院より御書を借りて二人でかついで来たといわれている。(御書の中に正木坊の事が記されている)

## 山田孫助の屋敷

正木南公民館の直ぐ南に庄屋の屋敷があった。山田孫助の屋敷と思われるが現在その面影はない。正木垣内までわずか300mの近さ。川の影響で交流が遠ざかる。



資料27

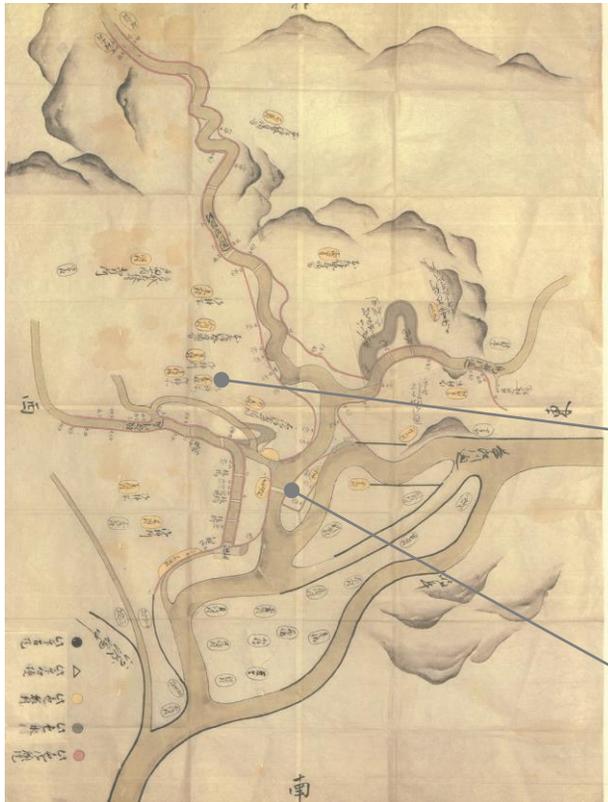
# 江戸時代の河川

『伊自良・鳥羽・板屋川通 堤御願墨引絵図』

岐阜市史 資料編近世2 付図6

寛政8年(1796)頃という

『黒野古市場 國島家蔵』



絵図が書かれた年代は黒野城が廃城になった慶長16年(1611)から約185年後の河川状況

- ・黒線は既存の堤
  - ・赤線は築堤願いの堤
- 長良川本流以外は殆ど堤防が無い

黒野

正木垣内



上絵図の部分拡大

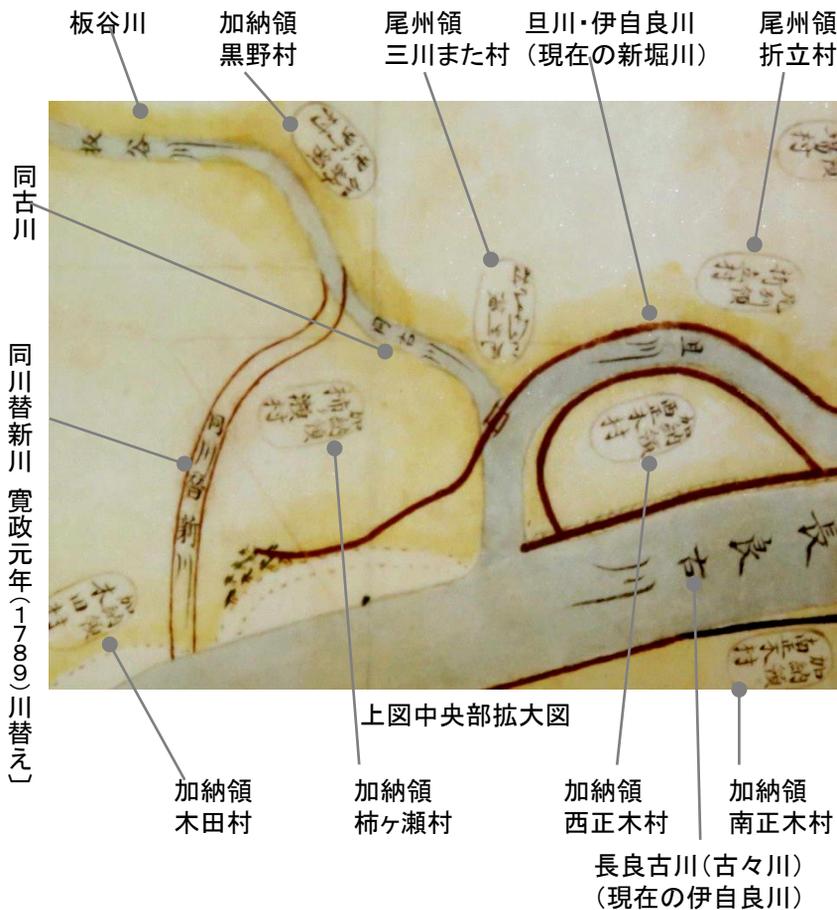
赤色線は新堤願いの堤防

資料28

# 板屋川は三ツ又・正木垣内の南へ流れていた



『宝永2年(1705)以前以後堤色分絵図』(部分) 天保(1830)～安政(1860)  
 『岐阜県図書館蔵(写し)・原図は岐阜県歴史資料館蔵』



・以前は三ツ又の南に板谷川が流れ旦川(伊自良川)に合流していた。

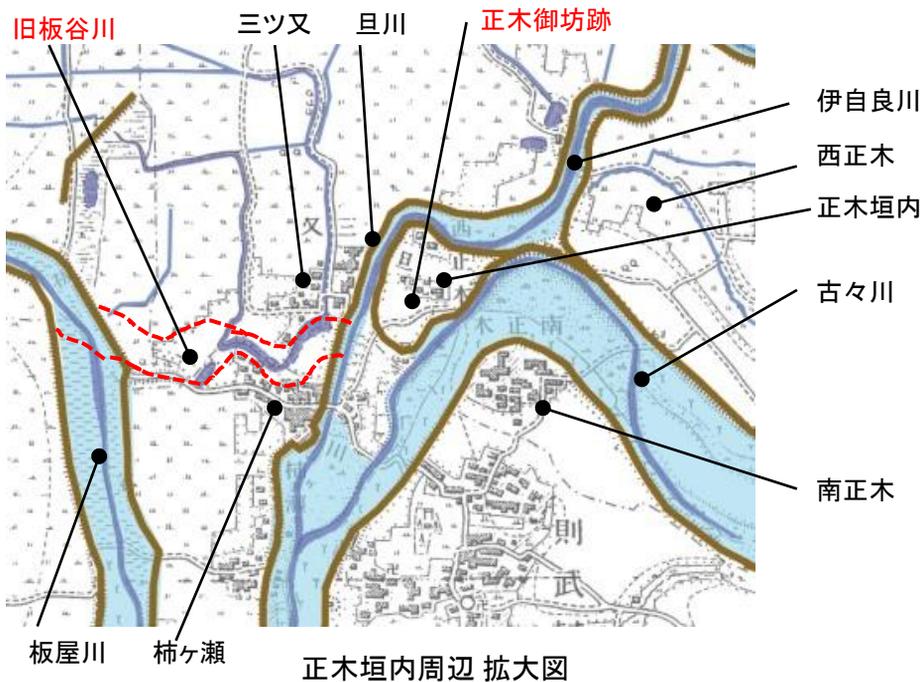
資料29

# 長良川の河川変遷

下地図は『明治43年発行 大日本帝国陸地測量部 岐阜2万分の1地形図』  
市教育委員会『則武輪中附近 河川変遷図』に基づき作成



- ① 最も古い川筋である古川
- ② 天文4年(1535)の洪水で出来た井川
- ③ 慶長13年(1608)古川の北岸に「尉殿堤」(じょうどのつつみ)が築かれる
- ④ 慶長16年(1611)洪水により尉殿堤一部が消滅し、古々川が現れる
- ⑤ 則武輪中堤が築かれる
- ⑥ 昭和14年(1939)長良川締切工事完了
- ⑦ 尉殿堤記念碑



資料30

# 正木坊附近の河川考察

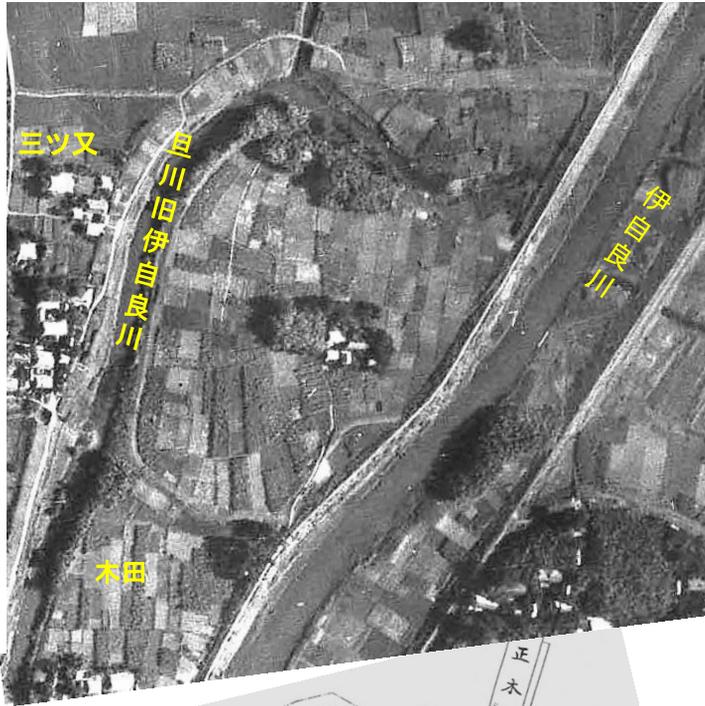


平成30年(2018)4月 Google Earth衛星写真

考察

資料31

正木垣内の空中写真変遷



昭和23年(1948)  
『米軍撮影・国土地理HP』

- 字名垣内のごとく水害を防ぐため西側、南側が輪中堤で囲まれている。
- 民家は北の藪の中に川口家1戸と中央に桑原家2戸の3戸のみ。
- 慶長5年(1600)岐阜城落城前「柿内正木郷寺内」に禁制が立った。正木坊があった当時は賑わったと思われるが、その面影や遺構は見当たらない。
- 正木村へは川を挟んで300mの近さ。昭和時代、小さな木橋が架かっていた。



昭和42年(1967)  
『鷺山地区土地宝典』

- 昭和初期の伊自良川新堤の河川工事で、地籍図が堤防下になっている。



平成30年(2018)4月  
『Google Earth』

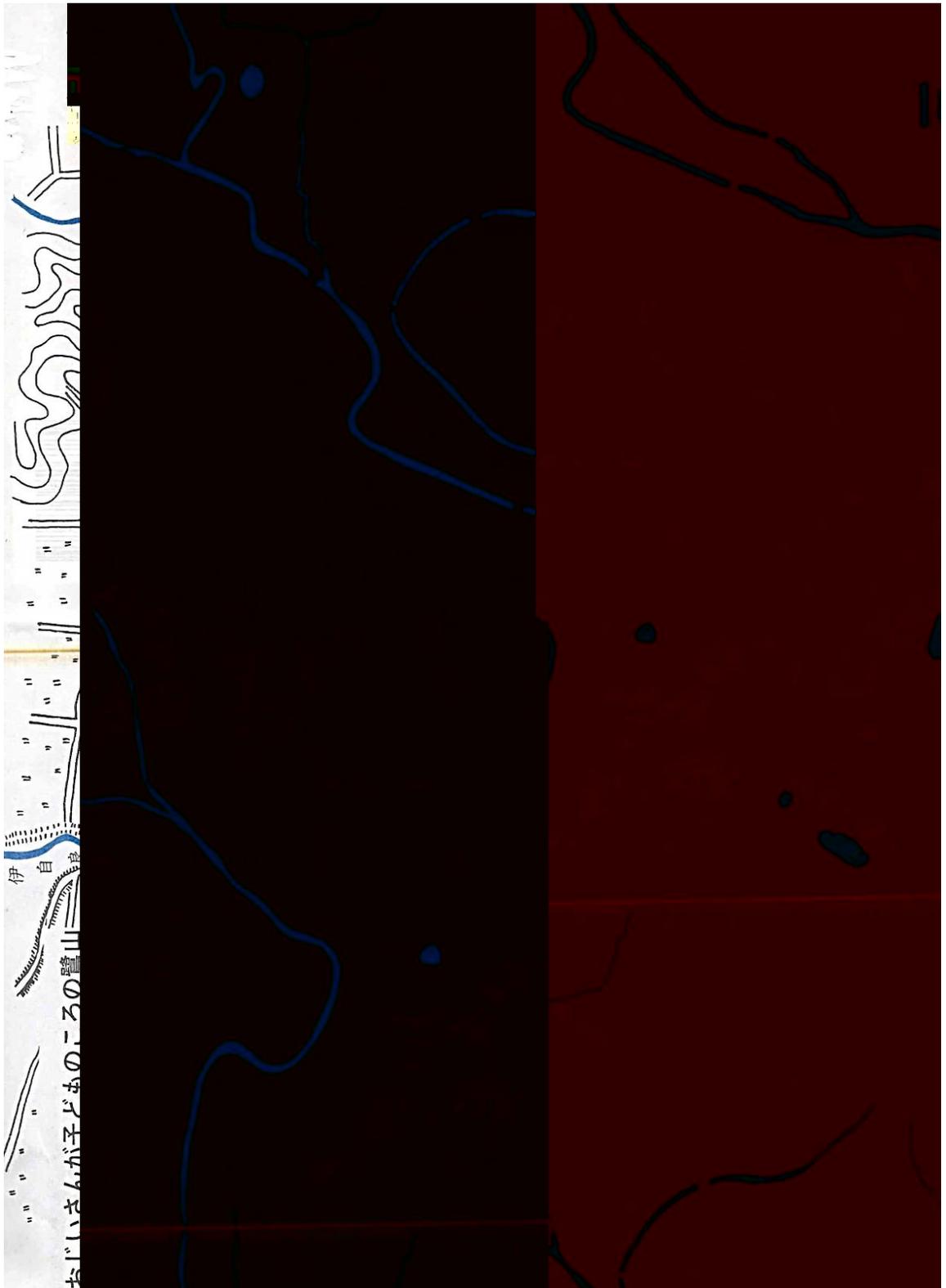
- 伊自良川堤防の改修や長良糸貫線の新道路工事で、眞中神社(昭和38年完成)の移動など大きく様変わりしている。



資料33

# おじいさんが子どもころの鷺山

『さぎやま』鷺山小学校創立100周年記念誌 昭和42年9月 106頁



資料34

領民を洪水から守るために築いた「尉殿堤」

じょうどのつつみ

「尉殿堤記念碑」岐阜市史跡指定・移設し除幕式



則武新田天満宮境内に移設の『尉殿堤記念碑』



のりたけわじゅうあと じょうどのつつみあと  
則武輪中跡・尉殿堤跡

岐阜市史跡に指定  
平成30年(2018)  
7月27日

長良川は、昭和14(1939)年の締切工事前は3本に分かれていました。この場所は古川と古々川の分岐地点であり、また則武村が輪中であつた頃の東端で、輪中堤防の起点でもあつたと考えられます。

17世紀初め、則武村を治めていた黒野藩の藩主である加藤左衛門尉貞泰が、治水のために堤防を築きました。堤の大半は直後の大洪水により壊れましたが、残存部は締切工事まで存続しました。

工事の翌年、ここより少し南に、堤の顕彰のため記念碑が建てられました。碑に記された文章の概要は次のとおりです。

この碑の地先から崇福寺に向かい造られた約600mの堤防を「尉殿堤」と称した。文献によると、堤防を築かせた加藤左衛門尉貞泰は、慶長15年7月15日に黒野から伯耆国米子へ所替となった。また口伝によると、貞泰は、住民を水害から救うため古々川を締め切ろうとした。各村から人々が集まり築堤を始めたが、加納藩主奥平信昌に知られ、築堤を中止せざるを得なくなった。さらに、信昌の妻で徳川家康の長女である亀姫の逆鱗に触れたため、貞泰は転封を命じられたという。この堤防は、短時間かつ人力の工事としてはすばらしく、藩の民衆のため親藩を恐れなかった左衛門尉の精神は鑑とすべきである。古川・古々川の締切工事は、昭和14年3月に完成、翌年9月には下流の締切工事が終わり、500年卒の願いが叶って、水堀が完全に無くなったのは今昔の感にたえない。

成するだろう。これを憂い、建て、その梗概を記す。  
川北水害予防組合 建立

工事により廃川堤となった土地は払下げされ、尉殿堤も消左衛門尉の徳を讃え、由緒ある史蹟を後世に伝えるため碑を  
昭和15年10月 長良

見その痕跡はみられませ  
えられます。  
かはわかっていません。天  
その下に尉殿堤が残ってい  
であり近代まで命脈を保つ  
上で重要です。

碑文が予想したとおり、尉殿堤は徐々に姿を消し、  
ん。則武輪中も、残っているのは天神社部分のみと考  
ただし、輪中堤防と尉殿堤がどこまで重なっていた  
神社の建つ高地は輪中堤防の名残とみられますが、  
る可能性もあります。  
残存部がある則武輪中と、築造年代・築造者が明  
た尉殿堤は、岐阜市の輪中集落と治水の歴史を考

平成30年10月 岐阜市教育委員会



「説明板」の文書



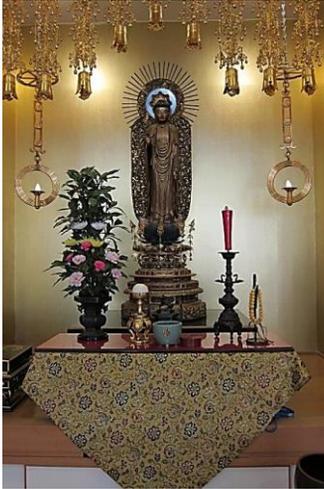
昭和15年(1940)  
建立  
旧「尉殿堤記念碑」  
天満宮の南東  
2012年筆者撮影



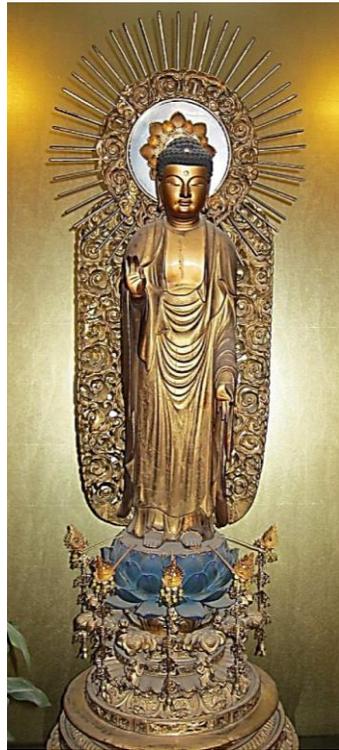
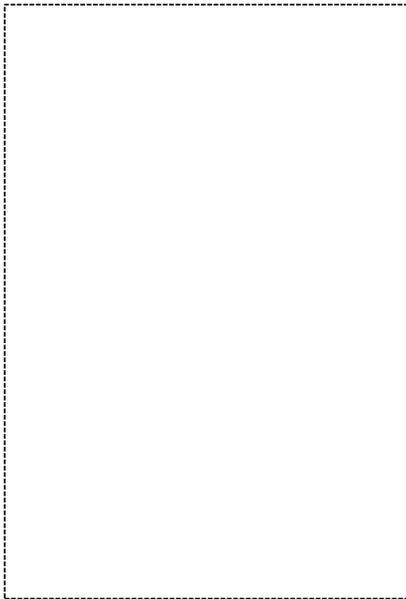
資料35

# 黒野別院の本尊 阿弥陀如来像 = 黒野あそか苑に安置 =

(筆者記)



黒野あそか苑ホールに安置の  
阿弥陀如来像



平成24年(2012)11月撮影

感想

# 資料36 正木ご坊と手洗い石

紙芝居「黒野のお殿さま」より  
平成24年(2012)制作



## ⑩ 正木ご坊と手洗いの石

正木にあるご坊と、手洗いの石を  
移すことになり、貞泰公は見学に出かけました。

伊自良川に橋をかけ、コロで動かしていたその時、  
柱が折れて、大きな石は、ザブーンと  
川底に沈んでしまいました。

お殿さまは、  
「皆のもの、怪我は無かったか？石のことは、もう  
良いぞ」と、言ってお城に帰りました。

伝記によると、三つ又の天王神社あたりに、  
埋もれているとの、ことです。

## 【題】「黒野のお殿さま」

製作・発行 黒野城と加藤貞泰公研究会  
協力 黒野小学校長林茂男・教頭正村仁・教頭鷲見隆司・  
六年担任(加藤初美・大井潤・松井浩和)  
岐阜大学教育学部教授小林月子  
脚本・挿絵 郷孝夫・河口耕三・郷和彦・関谷太治・岡野正弘・  
神山順子・名知 勲・郷 正子

## 資料37 正木ご坊の大瓦

=専長寺山田行雄住職(80歳)のお話し=

先代住職から聞いていた話、川で網に大きな瓦が引っかかり、附近にはこのような大きな瓦の民家はなく、この附近にあった正木坊の瓦を黒野へ移すときに、舟の荷崩れで川に落ちたのだろうという口伝。

(令和元年8月4日、専長寺にて関谷太治・筆者が初耳)

絵付け・上演 黒野小学校六年生  
(国島沙織・八代理子・河高井珠里・長谷川月菜・  
横山晃大・岩本麗奈・後・吉田淑乃・久世望未・  
久世翔太・河合駿次郎・大熊優二郎)  
村川奈美・河合菜々美・  
長屋涼香・久世航己・上佐藤大地・新田ゆうか・  
岐阜大学教育学部学生 山村綾乃・白石早希・  
(立木英香・宮部美希・佐藤田佳文・齋藤圭佑・  
大森美瑠・山下瑞穂・山本井給美)  
藤原綾香・丸山 悠・種  
村田正志・山田真緒・松補助対象事業  
平成二十四年度 岐阜市市民活動支援事業の課  
平成二十四年九月八日

資料38

## 黒野城主加藤貞泰について

◇ 加藤景泰・光泰



参考文献：加藤家文書『北藤録』、『一柳家系譜・由緒書』及び研究会調査資料より編集



加藤光泰肖像画  
東京大学史料編纂所データ

◇ 一柳氏 西別院の地で土郷

◇ 加藤貞泰

黒野城主(濃州方県郡黒野)



加藤貞泰肖像画  
愛媛県大洲 曹溪院蔵

米子城主(伯耆国 鳥取県)

大洲城主(伊予国 愛媛県)

## 編集を終えて

(筆者記)

加藤貞泰が黒野城下へ移したと伝える正木坊と、その後の黒野御坊について、書物などから、出来る限り収集したつもりですが、ルーツについては詳しくは光順寺の由緒がベース。大野家文書は書籍に公開されていない文書。双方に年代、氏名など不明点もありましたが、その検証までには至りませんでした。

また、慶長年間の真宗の状況や、この地方は洪水の影響で生まれた生活文化への影響が根深いことが現地調査などで分かりました。

## ＝加藤貞泰の偉業と黒野御坊の影響＝

引用文献 (順不同・敬称略)

□ 調査協力者（順不同・敬称略）

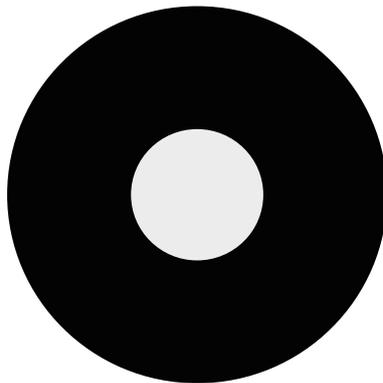
- ・本願寺岐阜別院 牧野大聖
- ・願誓寺住職 岐阜市西野町
- ・専光寺住職 岐南町八剣
- ・黒野 郷和彦
- ・掲載の各寺院住職
- ・あそか苑
- ・掲載の古文書/六字名号/絵図 所蔵者
- ・正木垣内 川口道男・桑原肇・桑原康夫
- ・南正木 神山光雄
- ・西郷の歴史研究会 春日井伸一郎
- ・解説/資料 研究会員 國島京子
- ・調査 研究会員 高橋信光
- ・資料 研究会員 名知勲
- ・資料/調査 研究会副会長 関谷太治

※ 本書は令和元年度、地域の事業者・企業様の寄附金にて印刷・製本しました。

## 正木坊から黒野別院へ

加藤貞泰・黒野に寺地誘致し後世賑わう





表紙 浄土真宗本願寺派（西本願寺）宗門の紋「西六条家下り藤」  
裏表紙 黒野城主 加藤家の家紋「蛇の目紋」